

No. 2

外邦図 研究 ニュースレター

平成15年度科学研究費補助金（基盤研究[A][1]）
「外邦図」の基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして
（課題番号：14208007）
研究成果中間報告書



空中写真測量要図「ボルネオ」十万分一圖壹参ロー三三
『サンダカン』（参謀本部，1944年）のサンダカン周辺部分。
サンダカンの街の北方に見える横縞模様の地図記号は、
マングローブを示す。

外邦図研究グループ

大阪大学大学院文学研究科
人文地理学教室

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

2004年3月

はしがき：「外邦図」のこと

石原 潤（奈良大学）

「外邦図」とは旧日本軍が外地について作成した地図のことである。その種類は数万点に及び、大部分は5万分の1や10万分の1の地形図であるが、小縮尺図や海図なども含まれている。この膨大な地図は、何時、何のために、どのような方法で作られ、戦後どのように処理され、現在どの程度残存しているのか。私達は最近このような疑問の追求に、いささか「はまって」いる。

私が最初に外邦図を見たのは、40年ほど前、まだ京都大学文学部の院生であった頃である。戦後資源科学研究所に所蔵されていた外邦図の一部が、お茶の水女子大学の浅井辰郎教授の取り計らいで京都大学文学部地理学教室に収蔵されることとなり、事務の女性が整理しているのを、横からながめていた記憶がある。その時は、自分が将来これらを利用することになるとは、夢にも思っていなかった。

外邦図の利用を最初に思いついたのは、30年ほど前、中国の集市（定期市）の歴史地理学的研究を始めて、方志（地方誌）記載の集市について正確な分布図を作成するため、大縮尺の地形図を探していた時である。たまたま古書市場に出ていた民国製10万分の1地形図や、京都大学人文科学研究所所蔵のそれを利用したが、対象地域の図幅を欠くことがしばしばで、窮余の策として京都大学文学部所蔵外邦図中の中国の地形図を引っ張り出した次第である。

一言で言えば民国製図も外邦図も私の研究に大いに役立ったのであるが、それらを利用して気が付いた点がいくつかあった。まず、日本軍が極めて早い時期（明治後期）から中国の地形図を独自に作成していたこと、ただしそれらは図の様式こそもっともらしいが、集落の位置や地名に誤りが多く、しばしば使いものにならない代物であったことである。これに対して民国期に入って各地の軍団が作成した地形図は、総じて図式が稚拙であるが、内容はおおむね正確であり、研究用のベースマップとして耐えうるものであったこと、また、おそらく民国製図を参照して作られた昭和期の外邦図は、図の様式や正確度において最も優れたものとなっていたことである。

二度目に外邦図の利用を試みたのは、20年ほど前、インドの市場の研究に取り組んでいた時である。私は1981年から82年にかけてロンドン大学に滞在し、大英図書館、旧インド省図書館、東洋・アフリカ学院図書館などで、インドの定期市に関する諸資料を収集し、特に19世紀以来の旧英領インドの地形図（1インチ=1マイル図等）が、市場の所在地や市日をも記載する格好の資料であることを確認していた。しかし限られた時間と予算では、膨大な量の地形図のコピーを手に入れることは出来ず、若干の事例地域に

ついて得たのみで満足せざるをえなかった。

帰国後 84 年から、科学研究費の海外調査でインドとバングラデシュの伝統的市の現地調査に従事するようになるのだが、現地での地形図の入手は容易ではなかった。インドでは地形図は市販されてはいるが、国外持ち出しは禁じられており、国境や海岸線から 100 マイルまでの図幅は市販さえされていない。また、バングラデシュでは地形図は一切販売されていない。地理学のフィールドワークに不可欠の地形図をどうするかで、やはり窮余の策として思いついたのは外邦図の利用であった。その頃私は、外邦図の一部が広島大学文学部地理学教室にも所蔵されていることを知るようになっていたので、京大・広大の両方で必要分をコピーさせてもらい、現地へ持参した。

戦前の英国製図も日本軍による外邦図も、現地調査には充分役立った。現在では行政区画にかなりの変更があり、相当数の新しい道路が走ってはいるが、集落や地名の大半は往時と比べて大差ないからである。その際、英国製図と外邦図とを比べて見て、面白いことが分かった。まず、外邦図は基本的に英国製図の「コピー」であって、縮尺を変え（例えば、1 インチ = 1 マイル図の 6 万 3360 分の 1 を、5 万分の 1 にする等）、凡例の説明を日本語に書き替える等の改変がほどこされているに過ぎないことである。従って、私にとって都合の良いことには、定期市の立地点や市日もしっかりコピーされていたのである。次に、英国製の 1 インチ = 1 マイル図は全インドをカバーしていたにもかかわらず、外邦図の 5 万分の 1 図はアッサムとベンガルをカバーしているのみで、その他の地域については 4 分の 1 インチ = 1 マイル図を改変した 25 万分の 1 図や、2 分の 1 インチ = 1 マイル図を改変した 12 万 5 千分の 1 図のみが作成されていたに過ぎないことである。インパール作戦に見るように、日本軍はアッサムを攻略しようとしていたのは紛れもない事実であるが、インド侵攻後の作戦地域はベンガルまでを想定していたのではあるまいか。

外邦図を利用した三度目は、10 年余り前から開始した中国でのフィールドワークにおいてである。以前には夢想だに出来なかった中国での現地調査が、可能になり始めたのは 80 年代末からである。私は 88 年に江南デルタで初歩的な調査を行い、95 年から、科学研究費の国際学術研究によって、河南省で 3 回、四川省で 3 回の現地調査を実行することが出来た。ところが、中国では現在多色刷りの優れた 5 万分の 1 地形図が出来ているにもかかわらず、外国人はこれを手に入れることも、見ることも許されない。やむをえず我々は外邦図や民国製図のコピーを持参した次第である。

その際、これらが充分役立ったかと言えば、残念ながら「否」である。革命後の計画経済期と近年の市場経済期を経て、中国の変貌はあまりにも著しい。集落も交通路も地名も行政区画も随分変わってしまった。ただ自然地形には変化がないので、それらの持

参が全く無意味だったとは言えないし、土地利用や景観の変化を実証する資料としては有効であった。

以上のように、日本帝国主義の遺物であるこれらの外邦図が、今も一定の利用価値を保持していることは否定出来ない。現代の地形図の入手と利用が不可能な国々（実はアジアのほとんどの国がそうであるのだが）ではフィールドワークの伴侶として、地形図の購入が可能な国々でも歴史地理学的な一級資料として、その利用が考えられるのである。

このようにいわば「ユーザー」として外邦図に関わるようになった私は、まず外邦図がどのような機関にどの程度収蔵されているかを調べ始めた。手探りで調べていくと、外邦図は京大文学部、広大文学部の他に、東北大理学部、東大理学部、お茶の水大文教育学部のそれぞれ地理学教室と、国会図書館とに大量に収蔵されていること、しかしながらそれらの収蔵図幅は互いに異なっており、相互チェックに基づく所在目録の作成が待たれることなどを認識するようになった。また、以前勤務していた名大文学部の地理学教室に、地質学者の名誉教授嘉藤良次郎先生から、一定量の外邦図をご寄贈いただくという幸運にもめぐり会えた。さらに、地形図収集で知られる岐阜県立図書館・分布図センターの顧問をしていたおかげで、東北大所蔵の外邦図の重複分が国土地理院資料館と分布図センターとに分与されたことを知り、早速東北大学に申し出て同様の分与の恩恵に浴することが出来た。ただし東北大と京大の関係は、単なる一方的な分与関係ではなく、相互に欠ける図幅をチェックしそのコピーを提供し合うという、より互恵的な形で行われた。

こうした活動を続けている内に、外邦図に興味を持つ多くの同士にめぐり会えたのも幸いであった。東北大学の田村俊和教授（現立正大）、大阪大学の小林茂教授、甲南大学の久武哲也教授、神戸大学の長谷川孝治教授等である。その後小林教授を研究代表者として申請した外邦図研究の科研費が昨年度より採択されて、研究は一挙に加速した。研究グループにより明らかにされつつある点は、おおよそ以下の通りである。

外邦図の作成は明治期より朝鮮半島、次いで中国大陸を対象に始まった。初期には、特務機関の関係者が基本的測量や観察・聞き取りにより情報を収集した。清朝末には、多くの中国人留学生が日本の軍関係の学校で測量や地図作成を学んでおり、中華民国成立後も、中国地図製作関係者と日本側との関係は深かったと推測される。その後日本軍は、民国製地図のみならず、東南アジア、インド、太平洋諸島に関しても、植民地宗主国が作成した地図を何らかの方法で入手し、それを改変して外邦図を作成した。外邦図が作成された領域は、北はシベリア、西はインド亜大陸、南はオーストラリア、東はアメリカ西海岸に及んでおり、軍事作戦の可能性のある地域を網羅していたと考えられる。ただし、大縮尺地図の作成まで行った地域と、小縮尺地図に止まっていた地域があった

ことは、インドについて述べた通りである。日中戦争や太平洋戦争が始まると、日本軍は占領地や作戦地について、測量や空中写真に基づく独自の地図作成を実行する。実戦のための情報を盛り込んだ兵要図も多く作成された。

敗戦とともに外邦図は数奇な運命をたどる。多くの外邦図は終戦の際に日本軍関係者によって焼却された。しかしその価値を惜しむ人々によって、かなりの外邦図が焼却をまぬがれた。最大のセットは、陸地測量部の地図作りを受け継いだ現国土地理院に引き継がれたが、ある時期に現防衛庁の機構に移管された。大きなセットが、旧資源科学研究所、東北大地理学教室などに持ち出され、前者のセットはのち、お茶の水女子大学、京大文学部、同東南アジア研究センター、広大、立教大などに分配された。後者からの分与の流れは、既に述べた通りである。外地及び内地で外国軍により押収された外邦図は、さまざまなルートを経てアメリカ、イギリス、オランダ、オーストラリアの図書館・公文書館などに収蔵されている。なお米軍は、朝鮮戦争にこうした日本製地図を使った可能性がある。

このように、外邦図は日本帝国主義の拡大と共に増幅し、その終焉と共に離散した。しかし、その作成時の意図とは独立に、その後は独自の効用によって今なお保存され利用されている。かつては高度の軍事機密であったが、現在はその多くが公開されている。それらはアジア・太平洋諸国の人々にとっても貴重な資料たりえよう。したがって、私達が緊急になすべき事は、全世界に及ぶそれらの所在リストの作成であろう。とりわけ私自身の当面の課題は、地理学教室の若い人たちの助力を得て、現在は京大総合博物館に収蔵されている外邦図について、書誌的情報を含む完全なリストを作成し、大方の利用に供することであると考えている。

(『以文』[京大以文会], 46号[2003], 4-7頁から一部訂正して転載)

外邦図研究ニュースレター No. 2 (2004)

目次

はしがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・石原 潤・・・

1

1 本研究の経過・・・・・・・・・・・・・・・・文責・編集：小林 茂・鳴海邦匡・・・1

2 第3回研究会

- 2 - 1 外邦図作成の記録としての各種一覧図と、地理調査所における
外邦図の扱い・・・・・・・・・・・・・・・・長岡正利・・・17
- 2 - 2 清国陸軍学生と陸地測量部修技所・・・・・・・・渡辺理絵・小林 茂・・・26
- 2 - 3 兵要地誌と宗道臣（少林寺拳法開祖）の生涯・・・・・・・・堤 研二・・・30
- 2 - 4 地図資料の用紙劣化対策についての一提言（話題提供）・・・源 昌久・・・33

3 第4回研究会

- 3 - 1 終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、および陸地測量部から
地理調査所への改組について（渡辺正氏資料をもとに）・・・金窪敏知・・・39
- 3 - 2 私と外邦図・・・・・・・・・・・・・・・・三井嘉都夫・・・46
- 3 - 3 外邦図と私のかかわり・・・・・・・・・・・・・・・・中野尊正・・・50
- 3 - 4 兵要地誌類作成過程に関する一研究：関東軍をとりあげて・・・源 昌久・・・54
- 3 - 5 第二次世界大戦中の機密図誌（海図・航空図）(1)・・・・・・・・坂戸直輝・・・58
- 3 - 6 京都大学総合博物館収蔵外邦図の目録作成作業について・・・山村亜希・・・74
- 3 - 7 アメリカ議会図書館所蔵の旧日本軍撮影
・中国空中写真の概況・・・・・・・・今里悟之・長澤良太・久武哲也・・・78

1 本研究の経過

2003 年度の研究経過

(1) 第 3 回研究会

2003 年 6 月 28 日～29 日、京都大学で開催され、以下のような発表がおこなわれた。

出席者（敬称略）：清水靖夫・石原 潤・田中宏巳・長岡正利・田村俊和・源 昌久・久武哲也・長谷川孝治・長澤良太・村山良之・内田忠賢・堤 研二・上田元・山近久美子・今里悟之・宮澤 仁・渡辺信孝・山村亜希・大浦瑞代・谷屋郷子・加藤敏雄・古川恭一・小林 茂・鳴海邦匡

<6 月 28 日（土）>

13 時 30 分より、京大会館にて開催され、以下のような発表が行われた。その際、新たに発刊された『東北大学所蔵外邦図目録』



写真 1: 京都大学東南アジア研究センターに所蔵される外邦図の見学（中央が河野京大東南ア研助教授）

（A3 版、244 頁）が披露された。また、その間に、京都大学東南アジア研究センターに所蔵される外邦図について、河野泰之同センター助教授の案内のもと見学した。この際、同センター所蔵の外邦図一覧ともいえる「帝国陸海軍作成地図一覧」（全 8 頁、英文）を配布していただいた。

1. 長岡正利〔国土環境（株）もと国土地理院〕外邦図作成の記録としての各種一覧図／地理調査所における外邦図の扱い、ほか」（話題提供）

まず、外邦図一覧図について、その作成の経緯と現在の所蔵状況について報告された。そして、国土地理院所蔵の「外邦図目録」とともに、旧地理調査所に所蔵されていた外邦図の由来と、その後の扱いについて紹介された。

ここでとくに検討されたのは、敗戦前後の地図をめぐる状況で、関係者からの聞き書きから、空襲による被害、疎開、終戦時の焼却、さらに米軍による接收と返却のプロセスが示された。敗戦後米軍施政下におかれた地域（沖縄・奄美・小笠原）については、施政権の返還のたびに接收された地図の原図も返却されたという点は、米軍の旧日本軍作製の地図に関する政策を考えるに際し、大きな意義をもつと考えられる。

その後の質疑のなかで、上記の一覧図を見比べることで地図作成の進展を知る

ことが可能なことにくわえ、旧陸地測量部の設置した三角点や測量データの継承について、台湾と韓国ではちがいがあることなどが指摘された。また、関連する多くの地図や文献資料を提示していただいた。



写真 2：長岡氏による報告

2. 田中宏巳（防衛大）「陸地測量部等地図の行方」

まず敗戦前の陸地測量部の疎開、さらに敗戦時の地図（原図）の焼却、米軍による接收などの事情について、関係者の証言（防衛研究所所蔵資料）よりくわしく紹介された。また、地理調査所からその後自衛隊 101 測量大隊（現中央地理隊）に移管された外邦図の概要についての調査結果を報告された。さらに海外に所在していた日本軍の主な測量機関の第 2 次大戦時～終戦時の活動について、関係者の証言資料（防衛研究所蔵）により検討され、とくに終戦後における地形図や資料の引継の状況について紹介された。

その後の質疑では、特に研究を進めるうえで必要となる資料の所蔵機関につい

て、例えば、ロンドンのインペリアル・ウォー・ミュージアム、レニングラード国立公文書館（関東軍関係の資料）や防衛研究所戦史部などを教示していただいた。また、復員省関係の資料は、聴き取りした資料が大量に存在するものの公にされていないことを指摘するとともに、自衛隊中央地理隊に保管されている外邦図資料の調査の難しさと緊急性についても触れられた。



写真 3：田中氏による報告

<6月29日（日）>

9時00分より、京都大学総合博物館地図室にて開催され、以下のような発表が行われた。また、これらの報告の後に、今後の予定について打ち合わせを行い、そして、京都大学文学部地理学教室に所蔵される外邦図について、山村亜希同博物館助手の案内のもと閲覧した。

3. 渡辺理絵（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）：「清国陸軍学生と陸地測量部修技所」

今世紀初頭、陸地測量部修技所に在籍していた清国陸軍留学生らを撮影した写真（大阪大学文学研究科人文地理学教室所蔵）を主な題材として、アジア歴史資料センターで公開されている近代資料などを参照しつつ、清国陸軍留学生の受け入れの経緯や、留学生らのその後の役割（辛亥革命などへの参加、中国の測量学校校長などへの就任）について報告した。

その後の質疑では、日中相互における地形図の類似性について意見が述べられたほか、田中氏より、日本から中国側に「教習」が派遣されていたこと（高等師範学校校長嘉納治五郎などが仲介、陸軍からも）が指摘された。

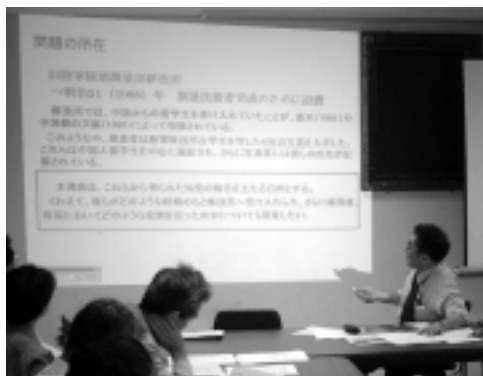


写真 4：小林による報告

4. 堤 研二（大阪大）：「兵要地誌と宗道臣（少林寺拳法開祖）の生涯」

兵要地誌や外邦図の作成をめぐる情報収集の活動について、少林寺拳法の開祖である宗道臣との関係から報告した。宗道臣は、土肥原機関の兵要地誌班員として情報の収集にあたるが、その活動の過程で中国における拳法の達人に技術を習

い少林寺拳法を大成させたという。

その後の質疑において、田村氏より、こうした情報の提供は口述で提供されたものであったこと、田中氏より、大本教との関係の存在について指摘された。



写真 5：堤氏による報告

5. 源 昌久（淑徳大）：「地図資料の用紙劣化対策についての一提言」（話題提供）

まず、外邦図資料の劣化、特に用紙の酸性化の問題に関して、その原因を指摘したうえで、資料の保存方法について報告した。そして、外邦図資料自体の脱酸化処理と、資料を保存する環境の整備の必要性について指摘した。ちなみに、こ



写真 6：源氏による報告

うした処理を東北大学で所蔵する外邦図資料に施した場合、その予算として4千万円以上が必要になるという。

その後の質疑では、各所蔵機関（東北大、地理院、神戸市博など）における収蔵の状況について報告があった後、田村氏より、資料の効率的な保存と活用を目指すために、外邦図資料の所在目録を全国的に整備することの必要性が指摘された。

<協議内容>

以上のあと、これまでの活動の報告や、今後の研究の打ち合わせをおこなった。その内容は、以下の通りである。



写真7：京都大学総合博物館収蔵の外邦図の閲覧

報告

1) 国内の資料整備

これまでの活動として、東北大学における外邦図目録の刊行、お茶の水女子大学における外邦図資料の収蔵状況の改善とその目録刊行の準備、大阪大学による『国外地図目録』『国外地図一覧図』（国土地理院蔵）の複写物の作成について報

告した。

東北大学からは、外邦図資料の所蔵機関である博物館において利用の方向性が定められていない状況にあること、目録の作成をめぐるノウハウを提供する準備のあることが述べられた。

お茶の水女子大学に関しては、東北大学による目録を利用した場合における必要となる作業量の見通しについて報告があった。

今後の計画

目録の整備：東北大学による目録をベースとして、京都大学総合博物館所蔵図やお茶の水女子大学所蔵図の目録を作成する。また、その過程で、他機関（京都大学東南アジア研究センター、岐阜県立図書館世界分布図センター）に所蔵される資料との照会や、『国外地図目録』（国土地理院蔵）との関係を見る。

調査対象機関の選定および実施：調査が必要とされた機関として、インペリアル・ウォー・ミュージアム（英軍接收による資料）、レニングラード国立公文書館（関東軍関係の資料）のほか、海上保安庁（外邦図として印刷された海図）なども提案された。また、中央地理隊に所蔵される地図の扱いに関しても、その調査の緊急性が指摘された。アメリカ議会図書館に所蔵される外邦図関連の資料については、昨年度に引き続いて実施され、今年度は、長澤氏および今里氏によって、同館における空中写真の調査を行う予定である。

第4回外邦図研究会の開催：11月8日（土）9日（日）に東京で開催すること

とした。

(2) 第4回研究会

2003年11月8～9日、駒澤大学において開催され、以下のような発表がおこなわれた。

出席者（敬称略、五十音順）

浅井辰郎・飯塚隆藤・生田清人・井口悦男・石原 潤・今井健三・今里悟之・上林孝史・牛越国昭・内田忠賢・大槻涼・小澤知子・角田清美・加藤敏雄・金窪敏知・後藤慶之・小林 茂・斉藤克・坂戸直輝・佐藤 久・佐藤礼次・清水靖夫・鈴木純子・鈴木喜雄・関沢俊弘・高木 勲・高橋健太郎・武居裕子・谷屋郷子・田村俊和・田原 敬・天明耕一・中島義一・中野尊正・長岡正利・中村和郎・鳴海邦匡・西村三紀郎・芳賀 啓・長谷川孝治・原 裕子・久武哲也・深谷 元・細井将右・水谷一彦・三井嘉都夫・源 昌久・村山良之・矢沢正安・山近久美子・山村亜希・渡辺 正・渡辺信孝・渡辺理絵

<11月8日(土)>

13時30分より、「地理学サロン」との共催のもと、駒澤大学246会館6階会議室で開催され、以下のような発表が行われた。また、会場には、多田文庫（駒澤大学図書館地図室および地理学教室地図室所蔵）における外邦図資料の一部が展示され、中村和郎同大学教授の案内のもと閲覧した。

1. 金窪敏知（元国土地理院長）「終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、および陸地測量部から地理調査所への改組について - 渡辺正氏資料をもとに - 」

外邦図について簡単な紹介があり、発表者と外邦図とのかわりについてふれられたあと、おもに渡辺正氏所蔵資料にもとづき、(1)1945年4月より参謀本部でおこなわれた「兵要地理調査研究会」、(2)第2次世界大戦終結時前後の陸地測量部と終戦にともなう地図の焼却、(3)陸地測量部から地理調査所への組織再編など、これまでほとんど知られていなかった外邦図に関連する基本的



写真8：中村和郎駒澤大学教授による開会の挨拶



写真9：金窪氏による報告

事実が示された。とくに「兵要地理調査研究会」は、差し迫っていたアメリカ軍との日本本土での戦闘に関連する問題を研究対象としており、当時の主要な地理学者が参加していた点は注目される。これによって形成された参謀本部の軍人と地理学者の関係が、終戦直後に参謀本部にあった外邦図の、各研究機関への持ち出しに大きく関与していることはあきらかで、今日大学等に残存する外邦図の移転のきっかけがほぼあきらかになった。また終戦直後の地図の焼却指令では、外邦図がおもな対象となっていること、陸地測量部から地理調査所への組織再編は、戦後復興にむけて、地図作製業務を軍から切り離すことをめざして早期に実現されたことも注目された。

2. 渡辺正氏の挨拶：質問と応答

上記発表で紹介された経過に、当事者として関与され、また関連資料をこれまで保管されてこられた渡辺正氏（東京都杉並区在住、元少佐、87歳）の挨拶、および回顧をお聞きした。なお、渡辺正氏



写真 10：渡辺氏による挨拶

の当時の回顧については、すでに『信濃毎日新聞』連載、「続占領下の空白、<地理調査所>物語」の第1回（1995年12月23日）～第5回（同12月29日）に掲載されている。この連載（全30回、1996年2月14日まで）を参加予定者にメール等でお送りしておき、話をうかがった。終戦当時の参謀本部の状況にはじまり、GHQによる地理調査所（1945年9月1日、陸地測量部を改変して発足、当時長野県に疎開中）の訪問調査（1945年9月下旬）の状況をくわしく紹介していただくとともに、陸地測量部の内務省移管と地理調査所の発足の経過、終戦前の兵要地理調査研究会についてもふれていただいた。

3. 中野尊正（東京都立大学名誉教授）「外邦図と私のかかわり」

中野教授は、すでにその著書『山河遙かに』（私家版、1990年、16頁）に、終戦後の1945年9月末（あるいは10月初め）に復員して、多田文男東京大学助教授（当時）の指示を受け、参謀本部にあった地図を研究用に運び出したことを記して

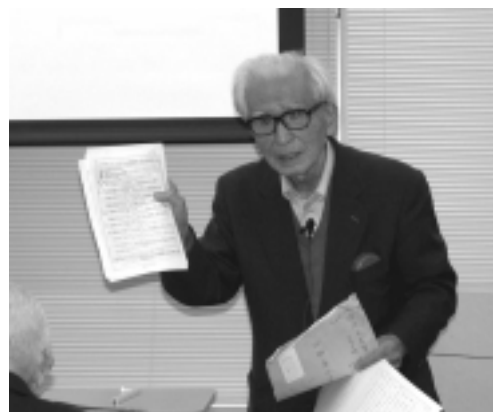


写真 11：中野氏によるコメント

いる。このときに運び出された地図は、最終的に資源科学研究所にもちこまれることになり、今日の大学所蔵の外邦図の主体をなすことになった(久武哲也「旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学・研究機関等所蔵の外邦図との系譜関係」外邦図研究ニュースレター，1号[2003年]，15-20頁参照)。上記ではまた、「渡辺少佐」を市ヶ谷の参謀本部にたずねたことにもふれている。この「渡辺少佐」は渡辺正氏であり、同氏の研究会の参加をお知らせしつつ中野教授のご出席をお願いしたところ、表題のようなメモを事前にお送り下さり、このコピーを全員に配布してお話をお聞きした。

終戦にいたるまでの中野教授の体験、さらに渡辺正氏が満州で兵役についていた中野教授を参謀本部に出向させようとしたこと、さらに運び出し作業の実際(参謀本部から大妻学園、さらに世田谷の関戸氏宅)などを紹介され、外邦図の利用をうたえられた。

4. 三井嘉都夫(法政大学名誉教授)「私と外邦図」

中野教授とほぼ同時期に復員し、やはり多田文男東大助教授(当時)の指示により、参謀本部から地図を運び出した三井教授からもお話をいただいた。ご自身の経歴の紹介からはじまり、参謀本部にあった地図の状況、運び出し作業についてふれるとともに、最終的に資源科学研究所に運び込まれるまで、アメリカ軍の眼を避けて、大妻学園、金子材木店など各地を転々としたことを紹介された。資源科学研究所に運び込まれたあともし

ばらくはそのままで、1959年になってその本格的な整理作業が開始されたという。この整理については浅井辰郎「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」(『大正・昭和琉球諸島地形図集成』解題、柏書房、1999年、23-26頁)を参照。



写真 12：三井氏による報告

5. 佐藤 久東京大学名誉教授のコメント

上記のような発表やコメントを聞かれた佐藤久東京大学名誉教授からコメントをいただいた。1944年当時東京大学大学院特別研究生であった佐藤教授は、陸地測量部の囑託として空中写真の判読



写真 13：佐藤氏によるコメント

に従事するようになり、1945年5月に長野県に陸地測量部が疎開してからも、ときどきそこを訪れていた。その際、すでに8月15日の終戦以前に、南方で撮影された空中写真のフィルムや空中写真測量による地図の原図を焼却していたのを目撃したという。また上記「兵要地理調査研究会」の最初の会合と記憶するが、参謀本部で辻村太郎東京大学教授(当時)および田中啓爾東京文科大学教授(当時)の講演会があったことを紹介された。さらに終戦後の1945年8月下旬に、佐藤教授は学生とともに参謀本部から日本の要塞地帯の地図を持ちだされたという。中国の5万分の1地形図や10万分の1地形図は精度が低く、それよりも秘図となっていた要塞地帯の地図に関心をもっていたということであった。

6. 浅井辰郎元お茶の水女子大学教授・日本地理学会名誉会員のコメント



写真 14 : 浅井氏によるコメント

さらに当日ご出席の浅井辰郎先生からもコメントをいただいた。上記「兵要地理調査研究会」には、辻村太郎・田中啓



写真 15: スピーチやコメントを頂いた方たちの記念写真(前方左より佐藤・浅井・渡辺・中野・三井・坂戸各氏、および後方左より高木・金窪各氏)

爾・多田文男など東京の地理学者の参加が多いが、京都ではそれより早い時点に軍（陸軍参謀高嶋大佐・間野少佐）と小牧実繁京都大学教授を中心とする地理学者との密接な関係が形成され、アジア各地の研究をおこなう組織があった（浅井辰郎「別技篤彦名誉会員のご逝去を悼む」地理学評論 70 巻 9 号[1997 年]、553-554 頁も参照）。「兵要地理調査研究会」を考えるに際しては、この組織との関係も考慮する必要を指摘された。

なお、この組織の活動については、1942 年から参加した故村上次男元甲南大学教授の記録がある（村上「日本地政学の末路」空間・社会・地理思想、4 号[1999 年]、50-56 頁）。またこの記録には、「昭和十八年になると陸軍からの要請で、武漢地方から四川盆地への戦略図を作成させ（ら）れた。この辺りの地形・歴史・産業などから総合的に判断して、それを図示するのである。参考の地図は航空機のための大きな多色刷りのものを提供された」（かっこ内引用者）というくだりがあり、作業に外邦図（航空図）が使用されていたことが推測される。



写真 16：懇談会の模様

この間、スピーチやコメントをいただいたシニアの方たちの記念写真（渡辺・浅井・中野・佐藤・三井・坂戸各氏にくわえ、金窪敏知氏・高木勲氏）を撮影した。新事実があきらかになるだけでなく、お互いに数十年ぶりに会われる方もあり、有意義な研究会になった

夜は付近の中華料理店で懇親会を開催した。渡辺正氏・浅井辰郎先生・三井嘉都夫先生を中心に外邦図を話題に懇親が進んだ。

<11 月 9 日（日）>

9 時 30 分より、駒澤大学第一研究館 1 階会議室で開催され、以下のような発表が行われた。そして、これらの報告の後に、今後の予定について打ち合わせを行った。また、前日に引き続いて、多田文庫における外邦図のうち、特に海図に関する資料の一部が展示され、中村和郎教授の案内で閲覧した。

1. 源 昌久（淑徳大）「兵要地誌作成過程に関する一研究：関東軍をとりあげて」

おもに関東軍に関連する兵要地誌の作成過程を『陸満密大日記』、『陸満機密大日記』により検討した。参謀本部第二部、関東軍司令部などの兵要地誌作成組織にはじまり、その作成マニュアル、さらに兵要地誌文献リスト（『兵要地誌資料目録月報』）と分析を進め、多数の文献が作成されたことを示した。また関東軍隷下の部隊が作成した兵要地誌を検討し、その内容を紹介した。



写真 16：源氏による報告

2. 坂戸直輝（元海上保安庁水路部）「第二次世界大戦中の機密図誌（海図・航空図）（1）」

外邦図のなかには海図や航空図などもふくまれているが、その研究はほとんどおこなわれていない。そうした観点からその機密図に焦点をあてて解説をお願いした。

まず、第2次世界大戦前から水路部に勤務されてきた経歴（坂戸直輝[2002]「海図に関する昭和の技術小史：水路部とともに歩んだ60年」地図，40巻2号，2-20頁，4号，22-39頁参照）の紹介からはじまり、水路部の位置、経緯度基点標、水路部の組織など基本的な事項にふれた



写真 17：坂戸氏による報告

あと、水路図誌・航空図誌の概説があった。つづいて機密海図の説明にはいり、その製図と印刷、あわせて暗号乱数表のことが紹介された。さらに水路部の空襲、疎開、敗戦についてふれ、そのごのアメリカ軍との関係、アメリカ軍への提出資料についても解説があった。末尾では、海象気象図・航空図・海陸兵要図についても解説していただいた。

なお、この発表は未完であり、次回の研究会でつづきをお願いする予定である。

<協議内容>

坂戸直輝氏の発表のあと昼食をとり、これまでの研究活動の報告と今後の研究計画について議論した。その内容は、以下に記す通りである。

報告

1) 国内の資料整備

これまでの活動として、東北大学における外邦図目録の発送とデジタル化の準備、お茶の水女子大学における外邦図の保存と整備、京都大学における外邦図目録の整備、大阪大学による『国外地図目録』・『国外地図一覧図』（国土地理院蔵）の複写物の電子化について報告があった。

東北大学については、昨年度に発行された外邦図目録の関係機関への配布が終了したこと、外邦図資料画像のデジタル化の作業を試験的に開始していることが述べられた。このデジタル化に関しては、地図をスキャニングし

て、そのファイルを圧縮することを試みているが、調整が困難であり、試行錯誤の段階であることが報告された（村山良之氏より）。

お茶の水女子大学からは、所蔵する外邦図資料を購入したマップケースに収めたこと、岐阜県立図書館による資料借用の依頼のあったことが述べられた。そして、目録化の作業については、冬季・春季休業期間に実施する予定であることが報告された（内田忠賢氏より）。

京都大学に関しては、同大学に所蔵される外邦図の目録化作業をおおよそ終了したこと、その目録の発刊を2004年3月末までには印刷製本を終える予定であることが報告された（山村亜希氏より）。

大阪大学からは、『国外地図目録』・『国外地図一覧図』（国土地理院蔵）データの電子化を行い、それを関係機関へ配布する準備を行っていることが報告された（鳴海邦匡より）。

2) 海外の資料調査

今里悟之氏（大阪教育大）より、長澤良太氏（鳥取大）とともに9月に実施したアメリカ議会図書館（ワシントン）での、旧日本軍撮影空中写真（中国江北地区）の調査について報告があった。イギリスでは Imperial War Museum が外邦図を所蔵していること、またその閲覧の条件について、長谷川孝治氏（神戸大）より紹介された。

目録の整備：京都大学総合博物館所蔵図およびお茶の水女子大学所蔵図の目録を作成し刊行する予定。

調査対象機関の選定および実施：海外の外邦図収蔵機関（カナダの Western Ontario University、イギリスの Imperial War Museum など）および国内の外邦図収蔵機関（立教大学・明治大学・靖国顕彰会など）で調査をおこなう。

渡辺正氏蔵資料の刊行：高木勲氏より、渡辺正氏が所蔵される資料について、その概要と整理状況を報告していただいた。今後は渡辺正氏所蔵資料の整理に努力してこられた金窪敏知氏・高木勲氏を中心に、その編集・刊行に努力することとした。これには、田中宏巳氏（防衛大）・久武哲也氏（甲南大）・源昌久氏（淑徳大）がおもにあたることとした。

第5回外邦図研究会の開催：東京で2004年5月ころ第5回研究会を開催することとした。

シンポジウムの開催：2004年度の日本地理学会秋季学術大会（広島）において外邦図をテーマとしたシンポジウムを開催することが提案された。

ニューズレター2号の発刊：2003年度における活動の報告として、ニューズレター2号を発刊することが決定された。

その他：今後の大きな課題は外邦図の活用で、その実例や問題点を検討していくこととした。

2003年度における研究の概要

(1) 研究実績の概要

今後の計画

国内の資料整備

昨年度刊行した東北大学理学研究科地理学教室蔵の外邦図目録を関係機関に配布した。

東北大学理学研究科地理学教室蔵の外邦図の試行的デジタル化を開始した。

京都大学文学研究科地理学教室蔵の外邦図（総計 13,495 枚）の目録を作成した。これについては平成 16 年度に刊行する予定である。

お茶の水女子大学地理学教室蔵の外邦図目録の作成を継続した。

大阪大学文学研究科人文地理学教室では、2003 年度に購入した空中写真要図などにつき目録を作成した。これらの資料については、昨年度購入した兵要地誌図と同様、1 点ずつ中性紙封筒に入れて文書保存箱におさめ、その保存にも考慮した。

大阪大学文学研究科人文地理学教室において、国土地理院蔵の外邦図目録である『国外地図目録』全 4 巻および『国外地図一覧図』全 4 巻の複写資料について、電子資料化（主として PDF ファイル）を行い、その関係機関への配布を一部はじめた。

海外の資料調査

2003 年 9 月に、長澤良太氏（鳥取大学）と今里悟之氏（大阪教育大学）がアメリカ合衆国の議会図書館に出張し、昨年度発見した日本軍撮影の空中写真 2,100 枚のうち、723 枚のスキャニングを行った。

2003 年 8 月に長谷川孝治氏（神戸大

学）がイギリスに別の調査で出張した際に、British Library 以外の外邦図所蔵機関である Imperial War Museum での閲覧条件を確認した。

研究会の開催

外邦図を所蔵する大学で 2 度の研究会を開催した。

2003 年 6 月 28 日～29 日、京都大学京大会館、総合博物館地図室で第 3 回研究会を開催した。発表は、長岡正利氏（元国土地理院）、田中宏巳氏（防衛大）、渡辺理絵氏・小林 茂（大阪大）、堤 研二氏（大阪大）、源 昌久氏（淑徳大）が担当した。また、京都大学東南アジア研究センター、文学研究科地理学教室蔵の外邦図を見学した。

2003 年 11 月 8 日～9 日、駒澤大学で第 4 回研究会を開催した。終戦前後の外邦図に焦点をあて、金窪敏知氏（元国土地理院長）の紹介のあと、渡辺 正氏（元参謀本部）、中野尊正氏（東京都立大学名誉教授）、三井嘉都夫氏（法政大学名誉教授）、佐藤久氏（東京大学名誉教授）、浅井辰郎氏（元お茶の水女子大学教授）など当時の関係者の証言を聞いた。また、海図については、坂戸直輝氏（元海上保安庁）の発表があったほか、源昌久氏（淑徳大）による報告もあった。くわえて、駒澤大学所蔵の外邦図を見学した。

ニューズレターの刊行

本研究参加者以外の方々や外邦図所

蔵機関に対し、今年度得られた知見を報告するため、冊子(『外邦図研究ニュースレター』No.2)を刊行した。ちなみに、昨年度発行の『外邦図研究ニュースレター』No.1については、全国の関係機関(大学の地理学教室や外邦図所蔵機関など120ヶ所以上)への発送を行った。

そのほか

日本国際地図学会平成15年度定期大会(於沖縄、7月)に小林 茂(大阪大)らが参加し、本研究の成果の一部を報告した。

大阪大学文学研究科人文地理学教室は、同大学総合学術博物館 第2回企画展「ジグソーのピースを探して - 調和と共生 - 」(2003年10月8日～13日)に参加し、「近代地図作製をめぐる中国と日本 - 技術移転と秘密測量 - 」と題する展示を行った。

文責：小林 茂・鳴海邦匡

第 3 回研究会

日時：2003 年 6 月 28 日～29 日

会場：京都大学

第 3 回研究会は、京大会館および京都大学総合博物館地図室にて開催された。また、その間に、京都大学東南アジア研究センターおよび京都大学文学部地理学教室に所蔵される外邦図について閲覧した。

2-1 外邦図作成の記録としての各種一覧図と、 地理調査所における外邦図の扱い

長岡正利（国土環境（株），もと国土地理院）

本稿は、「第3回外邦図研究会」（2003年6月28日）での発表配付資料を基として、標記内容について再構成したものである。また、末尾の表（2ページ分）は、長岡（1993）に掲載の現存の外邦図一覧図をとりまとめた結果について、現時点での所在状況を加筆・修正したものである。

外邦図作成の記録としての各種一覧図とその所在

ここで言う地図「一覧図」（index map）とは、地図の作成地域の図郭割り図に、作成各図の図名や発行年などを記入したものである。

陸地測量部作成の一般販売地図についての一覧図は、当初から地図元売りの小林又七商店経由で店頭頒布されており、その作成状況は清水（1993）に詳しい。また、外邦図と軍用の秘密図を含む業務用の一覧図も作られており、内邦近傍に対しての陸地測量部の地図作成の総大成と言うべきものに、昭和19年版一覧図（長岡，1993）がある。

なお、「外邦」の見方は今日とは異なるので、上記の一般販売地図の一覧図には、今日一般に言われる「外邦図」の地域（朝鮮・台湾・樺太など）も含まれている。

作成された地図の全貌を知るには、その作成地図一覧図によるのが至便である。一方で、「地図一覧図」は測量成果ではないため、地図の「図式」とともに、近年まではその系統的な保存はされてこなかった。一般販売図の一覧図は上記のような事情で市中に出廻っていたので、個人所蔵を含めてかなりが現存するが、秘密図を含む業務用一覧図については、陸地測量部や関係機関においては消耗品として使われてきたため、現存するものは少ない。

外邦図作成地域を含む外邦測量全般については、『測量・地図百年史』（1970）に詳しい。これは、関係者の多くが存命していた時代に豊富な資料によってまとめられたものだが、現在では、そのとりまとめの基礎となった資料はあまり残ってはいない。

個別図葉単位での外邦図作成については、一覧図に当たるのが最上である。しかし、外邦図一覧図は、その性格から軍内部のみの配布とされて定数管理がされてきた（配布番号記入あり）ようで、旧軍やその学校所蔵だったものが、敗戦時の滅却を免れて個人蔵となっている程度である。まれには、それらが古書市場に出ることもある。例として、2002年秋の「東京古典籍入札会」では、外邦図の一覧図として豊富な内容を持つ、『北方地区目録』・『南方地域目録』（と

もに冊子体)ほかが一括して出品(忠敬堂より)された。

現存する外邦図一覧図では、国土地理院に多くのものがある。末尾の表1は、冒頭のとおりで、長岡(1993)の時点でとりまとめたものについて、2003年4月時点で再調査を依頼した結果である。

他機関での所蔵としては、国立国会図書館に若干の一覧図があって、その『蔵書地図目録』(冊子体出版物)中に掲載・利用されている。敗戦時の参謀本部にあった外邦図は、当時の関係者の尽力によって旧資源科学研究所や東北大学に移され、近年、さらに再配分された(岡本,1995;久武,2003)が、現有諸機関への聞き取り(悉皆調査ではない)によっても、それらの中に各種一覧図の系統的な所蔵はない。

なお、外邦海図を含む海図一覧図には、『水路圖誌目録』(昭和19年版,22年版,1999年版急速覆版海図;ともに冊子体)がある。

外邦図目録『国外地図目録』の由来並びに地理調査所における外邦図(初刷)の扱いとその行方

(1) 外邦図目録『国外地図目録』の由来

外邦図に関心を持つ者の間で、外邦地域を対象とした『国外地図目録』(4冊組)とその一覧図(紙版4冊組)の存在が知られていた。藍焼・製本のこれらは、作成され

た外邦図の全貌を知るに貴重な資料であることから、今回の科研費で必要部数が複製された。

この目録作成の由来と、目録掲載の対象とされた外邦図については長らく不詳であったが、このほど、陸地測量部・地理調査所・国土地理院を歴任された佐藤^{さかえ}氏がこの作成に係わられたことが判明したので、聞き取りによって、作成当時の事情を知ることが出来た。以下は、その内容である。

- ・昭和32・33年頃に、当時の防衛庁防衛研修所(昭和60年に防衛研究所と改称)戦史室から、資料整理用の経費を貰って、この目録を作った。
- ・同目録に表示の「防衛庁」欄の数字は、地理調査所での整理の結果、複数あった外邦図を同所戦史室に移管した枚数を指し、「地理調査所」とは同所に残した外邦図を指す。
- ・目録と一覧図は各4冊で構成され、5組作られた。防衛研修所に1組を納めて、残りは地理調査所に保存した。その後、偕行社(陸軍将校クラブ)にも渡った。国立国会図書館にも渡されていて閲覧できる。
- ・作成方法:「目録」は、外邦図各図を1枚1行とし、個別図名を記して所属一覧図との対象番号を記載した。
「一覧図」は、既製の各種一覧図(またはその写真複製)を台紙に貼るかまたは手書きで作って、外邦図1枚ごとの有無を表示した。

(2) 敗戦直後の陸地測量部と創設の地理調査所での外邦図などの扱い

敗戦時の参謀本部（市ヶ谷）における外邦図の持出し・保存・再配分については、前述の岡本（1955）や久武（2003）に詳しい。

ここで説明するのは、地図作成機関であった陸地測量部における保存用の外邦図についてである。外邦図に限らず、印刷した総ての地図については、「初刷」と呼ぶものを1部は残す規程があり、これは戦後も引き継がれている。なお、ほかには、「最終校正刷」が、次の版の発行までは残されてその後には廃棄される。敗戦時の陸地測量部各現場にあった印刷図多数は自然体で散逸したが、「初刷」については残すべく努力が払われた。

以下は、前述の佐藤侑氏談に加えて、『測量・地図百年史』（1970）および信濃毎日新聞連載記事（1995-96）とそこに登場の諸氏の話をもとに総合し、とりまとめたものである。

なお、本稿末尾に、用語説明や組織の変遷と関連業務などについての補足説明を、「参考」として付した。

1) 「敗戦時までの日本国内」地域の地図

地図を含む各種の資機材は、陸地測量部から長野県の梓村、波田村などに疎開されて、そこで業務の一部が行われた。なお、

20万分1帝国図原版の全部とほかの一部の図は、新宿駅空襲で被弾・滅失した。このため、戦後の20万分1図は、写真複製による1色刷の不鮮明な図として発行された。敗戦直後に軍文書類は焼却され、一部資機材も破棄されたが、地図はそのままとされた。

占領軍（米軍）は、戦後の日本領土の地図原図・原版・初刷とも、一切手を付けなかったため、そのまま稲毛（黒砂町）の地理調査所に運ばれて利用され、後の目黒移転時にはそちらに移された。なお、戦後しばらくの間、米軍施政下にあった地域については、後述の外邦図と同じ扱いとなったが、施政権が返還になる都度、原図が返された。後に、歯舞色丹も同様とされた。

2) 外邦図と、日本領ではなくなった地域の地図

それらの地域についての地図原図は、梓村花見公会堂で接收されて松本市の浅間温泉（接收に来た米軍の宿舎）へ移された。その総ては、新宿伊勢丹デパートに本拠を置いたUS.AMS, Far East（極東米国陸軍地図局；当初は第64工兵技術大隊）へそのまま送られて、後に米国へ運搬された。その返還は無かった。

外邦図の原版は重いので手を付けず、後に、疎開先の梓国民学校花見分校からそのまま稲毛へ運ばれ稲毛で接收された。AMSが新宿伊勢丹から王子に移された時期に新

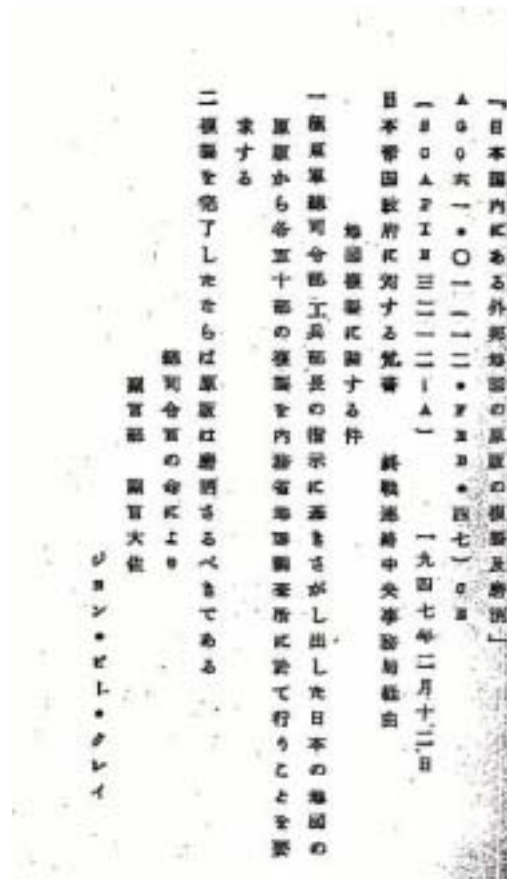


図1 外邦地図の印刷・原版処分に関する連合軍命令

たに印刷し、その原版は印刷終了後に返却され、破棄された。地図原版の全部は、重い亜鉛版であった。なお、地理調査所に対する連合軍命令「命により捜し出した外邦地図は原版から各50枚印刷して原版破棄」(図1)がある。

次に、その保存用「初刷」と、印刷図多数の扱いについて述べる。

各現場にあった印刷図多数は自然体で散逸したが、後に集められて、初刷と一緒に整理されたものもあった。組織的な焼却はないが、敗戦直後に焼いた現場もある。「初刷」は、明治大学予科校舎の陸地測量部で

梱包され、梓村花見公会堂に運ばれてそのままとなっていたが、接收を免れるために敗戦直後に高山市の関係者宅に移された。以下、初刷の行方の説明である。

昭和22年に、高山市から稲毛に移された。その後も、公式には「存在しない」状態が続き、所内で一部の職員に引き継がれていた。

昭和30年頃となって、開梱して整理され、内部では閲覧可能な状態になっていた。その総数は、約2.3万枚であった。各所に残っていた外邦図で、後に移されて来たものもあった。

その後、防衛研修所からの依頼があって、前述のとおり、整理したものの目録と一覧図を作った。そのころから、研究者などで、非公式で見に来る少数の人や、コピー請求も出始めた。

昭和40年代に入って、折からの反戦機運（参考3の中）の中で、ある幹部（某課長と、将官級の人物）が、「所蔵していると色々面倒だ」との考えで、上部の了解のもとに他に全部移管した。以後、地理調査所では外部からの照会に対して、「そのような地図はない」と言ってきた。

防衛研修所は、戦史編纂に不可欠な資料としての資料調査を進めたものであり、当時、同所でも、不足分を地理調査所から補って、外邦図の一式をそろえた（コピー複製を含む）。ただし、戦史編纂用資料であって、書込みなどかなり使われた。なお、現在の防衛研究所戦史部には、相当数の陸地測量部地図と水路部海図があるといわれているが、上記の移管外邦図ではない。

この移管外邦図は、1991年頃に実見したところでは、隅を金属で補強した柿渋引き紙箱（地理調査所当時に米軍から供与されたもので、航空写真用等で使っていた。約15×35×25cm程度）に整然と保管されて、そのまま経過している。一部を確認したところでは、『国外地図目録』と一致する。

このことおよび敗戦前後の状況から、これが、保存用「初刷」がそのままの形で残されたものに相違ないことが判った。このセットが外邦図としては最も完璧と思われ、

将来における公開が望まれる。

参考1：用語説明

原図：製図工程を経て、墨入れ・清絵されたもの。やや厚手の洋紙上に製図されている。

原版：各種のものがあり、明治期以来の彫刻銅版原版や、後の時代の亜鉛版が保管されていた。その後、原版はフィルム化される。

初刷：文字どおりの初版のほか、内容にわずかな修正等を加えた再刷版も「初刷」として保存。対して、保存義務のない「最終校正刷」があるが、殆どは散逸した。印刷直前の修正指示と点検確認印のあるもので、外邦図のうちで、国土地理院に唯一全図揃いで残っていた東亜100万分1輿地図はこれが大部分である。

参考2：敗戦前後からの組織の変遷と関連業務

昭和18年

- ・敗色漂う中で、タ作業（太平洋沿岸現地作戦用（本土決戦用）地図作成）が進展。
- ・外邦地域の地図は、輸送の困難性などもあって次第に縮小。

昭和19年

- ・タ作業を民間印刷会社にも外注。大日本、凸版、共同の各印刷会社。
- ・三宅坂から、明治大学予科校舎（杉並区

和泉)へ疎開。

昭和 20 年

- ・ 5 月 25 日：三宅坂庁舎は、空襲で大半が焼失。
- ・ 4～5 月：さらに、波田国民学校に疎開(総務課・第三課(旧・製図科)の写真製版と印刷)。ここで、輪転機 2 台稼働。

塩尻国民学校(第一課[旧・三角科]・第二課[旧・地形科])、梓国民学校(第三課の製図)、安曇国民学校(倉庫)、温明国民学校(教育部[修技所])。

なお、高山市(大井家)での印刷も計画された。

- ・ 8 月 15 日～：「状況ノ転変ニ伴フ作戰用地図処理要項」(8 月 19 日付け)で、地図焼却。

波田では、焼いた後で中止命令が来た。これについては、各種の話がある。(結果としては、各現場にあった印刷図はともかく、外邦図・兵要地誌図を含む軍事極秘以上の初刷も、保存状態のままで残置された。)

- ・ 8 月 31 日：陸地測量部廃止。
- ・ 9 月 1 日：内務省国土局地理調査所設置(看板の掛替え)。
- ・ 9 月 25 日：GHQ が調査に初来訪。その後も度々。

昭和 21 年

- ・ 3～7 月：千葉市黒砂(稲毛)の旧戦車学校校舎に逐次移転。

昭和 22 年

- ・ 12 月 31 日：内務省廃止、建設院など設

置。

昭和 23 年

- ・ 7 月 10 日：建設省設置,その付属機関に。

昭和 24 年

- ・ 6 月 3 日：測量法公布。

昭和 25 年 6 月 25 日～昭和 28 年 7 月

- ・ 朝鮮戦争及びその後の冷戦構造。

昭和 27 年

- ・ 4 月 28 日：サンフランシスコ平和条約発効。

協定による外国軍の駐留は妨げないとの規定(第 6 条)等にもとづいて、同時に、日米安保条約(昭和 27 年 4 月発効,昭和 35 年に改定新条約)。

昭和 35 年

- ・ 7 月：国土地理院に名称変更。

参考 3：主な米軍指令作業など

昭和 21 年

- ・ 1 月：基準点標石調査・復旧。
- ・ 2 月：地名調査。
- ・ 3 月：土地利用図作成, などなど, 矢継ぎ早に指令。

昭和 28 年

- ・ 3 月 4 日：「地図作製及び測量の方針運用に関する取極め」

日本国内についての、測量資料の相互提供。

米国により作成中の基本図への援助。

完成後は日本が維持。

日本領土に関する総ての地図の相互交

換，各 15 部。

米側からの，測量用空中写真全国一式
2 組の貸与。新たに撮影のものは，そ
の都度，2 組を提供。

ほか，技術交換など。

昭和 34 年

- ・ 11 月 17 日：覚書，日米共同使用のため
の「5 万分 1 特定地形図」作成。39 年ま
で 454 面作成。（それ以前から，AMS によ
る日本北半の「5 万分 1 米軍地形図」作成
あり。）

昭和 40 年

- ・ 特定地形図を販売。昭和 37 年から前 2
者の，日本の地形図への「切替作業」。
以上，政府間協定等による公的なもので，
非難されるものではなかった。

昭和 42 年

- ・ 5 月～：米軍への協力などについて，マ
スコミ・国会で問題視される。
- ・ 5 月 10 日：参議院予算委で佐藤首相答弁
「日米安保体制上（このような地図作成
は）やむを得ない。」
以後，マスコミでの問題視は沈静化。

文献

岡本次郎（1995）：地理学教室創立の年，『東
北大学理学部地理学講座開設 50 周年記念
誌』，64-74 。

清水靖夫（1993）：地図一覧図について．地
図，31（4），2-11 。

信濃毎日新聞（1995-96）：続・占領下の空白
「地理調査所」物語（12.23～2.14 の 30 回連
載）。

測量・地図百年史編集委員会編著（1970）：『測
量・地図百年史』，建設省国土地理院，673。

長岡正利（1993）：陸地測量部外邦図作成の
記録．地図，31（4），12-25 。

長岡正利（1993）：幻の昭和 19 年地図一覧図
- 陸地測量部内邦地図成果の総大成とし
て．地図，31（4），41-44 。

久武哲也（2003）：旧資源科学研究所所蔵の
外邦図との日本の大学・研究施設等所蔵の
外邦図の系譜関係．外邦図研究ニューズレ
ター，No. 1，15-20 。

2-2 清国陸軍学生と陸地測量部修技所： 日中間における測量技術の移転について

渡辺理絵（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）

陸軍陸地測量部修技所は、明治 21(1888)年、測量技術者育成のために設置された日本陸軍の教育機関である。修技所は、明治末期から清国陸軍留学生を受け入れていたことは日本のみならず、中国においても知られている（『中国測繪史』1995 など）。しかし、修技所へ入学した経緯や母国での役割などについては、いまだ十分な検討がなされていない。

このような中、発表者は陸軍修技所在学生を撮影した写真を入手した。これらは、中国人留学生を中心に撮影され、写真裏に

は彼らの氏名が記載されている。

本研究は、これらの写真から得られた知見を報告するとともに、日中間で展開した近代地図作製をめぐる技術移転について検討することを目的とする。

修技所へ進学した清国留学生は、3年の測量教育を受けた。修技所への留学は、明治 37(1904)年から開始され、辛亥革命の起こった明治 44(1911)年まで、8年間継続した。その間の入学者数は総計 132 名とされている。これら留学生の氏名について、第 3・4 期生は入手した写真より、さらに第



写真 1 第 3 期清国陸軍学生 明治 41(1908)年

5 期生に関してはアジア歴史資料センターがネット上で公開している陸軍の修技所卒業生名簿(「大日記乙輯」)より抽出した。次に修技所卒業後の彼らの動向について追跡調査した。

写真1の下方には、「明治四十一年十二月陸地測量部第三期清国留学生卒業記念」と記され、第3期中国人留学生を写していることがわかる。修技所の教官とともに中国人留学生の姿が確認できる。写真1の裏に

も含まれている。写真2は第4期留学生を写している。写真の裏側には「明治四十三年(宣統元年)八月二十五日信州上諏訪に於て 第四期留学生ト共ニ写ス」と記載され、上諏訪で撮影されたことがわかる。留学生は各自スケッチブックなどを手にしており、測量実習中あるいは当時長野地方で進められていた五万分の一基本測図の作業過程であったと考えられる。写真3は、同じく第4期留学生を撮影した集合写真であ



写真2 第4期清国陸軍学生(明治43(1910)年)上諏訪にて

は、彼らの氏名が記載され、それによれば下段は邦人測量師6名および幹事、講師が座している。中段および上段の学生服を着している者が中国人留学生である。彼らの中には、のちに中国中央陸軍測量学校の校長となる李蕃や同校の教育長となる劉器鈞

る。写真下方に「明治四十三年陸地測量部第四期留学生卒業記念」と記され、写真裏には全員の氏名および職掌が確認できる。それによれば最前段中央には、陸地測量部長の大久保徳明を挟んで右側に中国陸軍学生監督の姜思治および左側に廬紹鴻が位

置し、その他は製図科長や地形科長、事務官などの要人が座している。二段目から三段目は製図科や地形科の測量手や測量師が位置し、三段目から最上段にかけて学生服を着している彼らが中国人留学生である。

最上段右から2人目に位置する黄郭は、1880年浙江省で生まれ、1904年浙江武備学堂に首席で入学、翌年、留日陸軍学生として浙江省から派遣を命じられた。はじめ東京の振武学校に入学し、同校では蒋介石と同学になっている。このうち数学が得意であった黄は、陸軍陸地測量部地形科に編入し、1910年、第4期生として卒業を迎える。母国帰還後、清国政府の軍諮府測量部地形科科員となるものの、辛亥革命が起こると上海に赴き、上海軍第2師師長に任命されている。翌年、南京政府が成立すると江蘇

都督府参謀長に指名され、その後、ワシントン会議中国代表団顧問や国民政府委員兼外交部長など国家的要職を兼任する。

3段目右から3人目の俞應麓も黄と同じく陸地測量部修技所の第4期生である。1878年江西省で生まれた俞は、少年時代、私塾で学び中学堂に進学する。1903年江西省武備学堂に進学し、2年後同省からの選抜で官費留学生として日本の振武学校に進む。その後、陸地測量部修技所第4期生として三角科へ進学。同じ頃、静岡の旅館店員と結婚し男児をもうけている。家族を残し単身帰国した俞は、江西省の測繪学堂学監となり、同校の学堂改組に尽力する。1912年以降は、近代地図作製や測地事業の職からは離れ、都督府の軍務部長および軍政司長などを兼任し、晩年には都督府軍事会議



写真3 第4期清国陸軍学生(明治43(1910)年)

最上段右から2人目が黄郭、3段目右から3人目が俞應麓

特派員や江西討袁軍司令部總監といった軍部の中核的な任務に奉職している。

修技所留学生の中には、帰国後、中央陸軍測量学校校長や山西陸軍測量局局長、江西省測量局三角科科长などに就任している者がおり、中国における近代測量教育および測量事業の中心的な役割を担ったことがわかる。また、上海陸軍参謀といった国家的要職に就いた者もいた。

留学生受け入れは、明治44(1911)年入学の第8期生で停止しているが、辛亥革命が起きた同年には、残る在对学生に対しても修業期間を残しながら退学が命じられている。このため、修技所への測量留学は8年という非常に短期間のうちに終了した。

ところで、同じ頃、日本から清国へ渡って各種技術を教授していた「日本人教習」が少なくなかった。その中には、測量技術教習も含まれ、清国の要請に基づいて、明治39(1906)年から広東省・四川省・江蘇省などの測量学校に招聘されている。この時期は、中国の測量学校がようやく全国的に整備され始めた時期であった。

以上から、日中間において、清国学生の修技所への留学、さらに中国へ渡っての測量教習といったかたちで1900年初頭、近代地図作製を前提とした測量技術の移転が非常に短期間のうちに行われたことが判明する。興味深いことに、辛亥革命後の中国では、日本の地形図(管見では明治33年図式)と酷似した地図が作製されている。

以上のような交流が日中間で展開した反面、日本軍は中国において秘密測量を行っていた。明治27(1894)年以降、非合法的な測量が実施されたことは『外邦測量沿革史』などからうかがい知り得る。今後は、こう

した二面性を考慮しつつ、さらに地図の作製と利用をめぐる中国と日本の関係について検討したい。

文献

小林共明(1984)「初期の中国対日留学生派遣について - 戊戌政変を中心として - 」辛亥革命研究4, 1-16頁.

小林共明(1985)「振武学校と留日清国陸軍学生」(辛亥革命研究会編『中国近現代史論集 - 菊池貴晴先生追悼論集』汲古書院) 277-309頁.

参謀本部北支那方面軍司令部編(1979)『外邦測量沿革史: 草稿』ユニコンエンタプライズ.

高木菊三郎(1961)『明治以後日本が作った東亜地図の科学的妥当性について』私家版. 中国測繪史編輯委員会編(1995)『中国測繪史』中国測繪出版社.

黄福慶(1975)『清末留日学生』中央研究院近代史研究所.

山田辰雄編(1995)『近代中国人名辞典』霞山会, 298~300頁.

陸地測量部編(1948)『陸地測量部沿革誌』陸軍参謀本部陸地測量部.

JACAR(アジア歴史資料センター)「清国陸軍学生卒業の件」(大日記乙輯 明治44年) Rf. C02031421800.

Howard L. Boorman, Richard C. Howard, editor. (1968): *Biographical Dictionary of Republican China*, New York: Columbia University Press, pp187-192.

2-3 兵要地誌と宗道臣（少林寺拳法開祖）の生涯

堤 研二（大阪大）

本報告では、兵要地誌の情報収集に従事した人物であり、中国におけるその活動と並行して拳法の達人を訪ね歩いて習得した拳技をもとにしてそれらを集大成・体系化し、日本少林寺拳法の創始者（開祖）となった初代・宗道臣の行動の軌跡の概要を追跡する。

今から約 1500 年前、ダルマ（達磨）大師によって、現在のインド・パキスタン方面から嵩山少林寺（現在の中国河南省にある）に拳法が伝えられ、その地では座禅と並行して拳技修行が為されていた、と伝説ではいわれている。また、その技術の原型は古代インド拳法である、という説もあり、阿吽二体一對の仁王像はその形式を表現したものである、ともいう。こうした拳技は時の権力の庇護ないし政治的な弾圧による栄枯盛衰を経験していった。

少林寺拳法の開祖である初代・宗道臣は、昭和初期において特務機関のもとで兵要地誌関連の情報収集をしつつ、義和団事件後の弾圧によって中国各地に散らばったり潜伏したりしていた各種拳法の達人を訪問しながら拳法の技を習得し、日本に帰国してから自身の武術体験をふまえて、技術を体系化・再編成した。これが少林寺拳法である。

現在の少林寺拳法の組織には、大きなくくりとして「少林寺拳法グループ」（総裁は宗由貴・二代目宗道臣）があり、そのもとに「財団法人・少林寺拳法連盟」、「宗教法人・金剛禅総本山少林寺」、「学校法人・禅林学園」の三法人と「少林寺拳法世界連合」

（WSKO）がある。少林寺拳法経験者（拳士）はその数約 140 万人、現役拳士は 10 万人から 14 万人くらいであるといわれている。

その技術体系は、剛法・柔法・整法（整骨等）の三法二十五系から成り、中国拳法・空手・柔術・柔道・合気道・サンボ・ボクシングなどの技術も参考にしながら編成されている。少林寺拳法は単なる格闘技ではなく、思想的にも護身術としての位置づけが為されており、経絡秘孔（いわゆる「ツボ」、「急所」）を重視する点などの特徴がある。

日本軍部ないしその関連機関による兵要地誌や外邦図作製に関する情報収集は、中国大陸においては、すでに明治 20 年代から非合法的に行われていた。のちに、こうした活動に従事していたため、殉職しても靖国神社に祀られなかった軍人たちを合祀すべきであるという運動が生じているが、その請願書などを見ると、実に多方面にわたって明治期以降の日本軍部が軍人を各地に派遣して諜報活動に従事させていたことがわかる。

兵要地誌が収録する情報は多岐にわたる。対象地域の気候・土壌・植生・地形などは細かい地点のポイント情報を含む場合もある。例えば主要な道路の地盤であるとか、海岸であれば、上陸可能な地形かどうか、という戦術的な記載事項もあれば現地住民の「鎮撫」、現地の風土病の状況と治療法・治療薬に関する情報などの記載がある。一口に「兵要地誌」といっても必ずしも統一

の書式があったわけではない。こうした兵要地誌に関する情報収集には、軍人だけでなく、非軍人の特務機関員やネイティブな人員の協力が必要不可欠であった。

本報告に関していえば、中国各地の地誌情報の収集を中国人と協力しながら特務機関の日本人が行い、その総括は関東軍司令官クラスが行っていたのである。具体的にいえば、土肥原賢二大佐(後に大将となり、戦後の極東軍事裁判判決によって絞首刑となった)のもと、いわゆる土肥原機関の兵要地誌班員として兵要地誌情報の収集に当たっていたのが、日本人の中野理男(のちの初代・宗道臣)であり、その中国人の協力者が陳良という人物であった。中野は陳と組んで、地誌情報の収集と各地の組織との連携工作をしていたようで、その合間に拳技を習得していった模様である。

中野理男は、1911(明治44)年、岡山県英田郡江見村(現作東町)に生まれた。少林寺拳法開祖・宗道臣として亡くなったのは、1980(昭和55)年5月12日である。

彼は、1925(大正14)年、14歳の時に、奉天(当時の呼称。以下、中国の地名呼称には当時のものを記していることを了解頂きたい)の祖父のもとへ出立し奉天中学を修了後に一時帰国し、家族の相次ぐ病没によって一人身になってからは東京の頭山満宅に居候する。中野は1928(昭和3)年、17歳の時に、再度満州へわたって土肥原機関のもとで情報収集などの仕事に従事した。この間に陳良老師と知り合って白蓮門拳を学んでいる。なお、情報収集に関しては中国の種々の秘密結社のネットワークを利用し、またその為に中国人協力者の存在が必要不可欠であった、という。

中野は、1929(昭和4)年、18歳の時に兵要地誌作成の為、彼のいう「満蒙大旅行」を行い、遼寧省・吉林省からハイラル・ハロンアルシャン・熱河省を回って各地に残る拳技にふれた。そこでは軍事用地誌の為の情報収集、各地の組織との連絡が主目的であったが、チフスに感染したことから、翌年帰国した。帰国・療養後、各務原飛行隊に入るも、1931(昭和6)年、20歳の時に心臓弁膜症の為に除隊を余儀なくされた。そこで関東軍囑託・奉天陸軍特務機関での業務を行うべく三回目の渡満を行った。

1932(昭和7)年、21歳の折到北京に移り、特務の仕事継続しつつ、文太宗老師の門に入り義和門拳を学んだ。1936(昭和11)年、25歳の秋に西安へ行く途中で文老師とともに嵩山少林寺に立ち寄り、「義和門拳21代師父」継承の式を行っている。

この後には、特務機関での仕事からは直接的には次第に離れて、瀋江省警務庁特務視察(鉄道警護隊員)となり、ソビエトとの国境の町、綏芬河に赴任し、さらに、1939年(昭和14)年、北辺振興計画に基づき新設された綏陽県の商工股(課)長となり同県商工会事務局長となって34歳で終戦を迎えた。

その後帰国し、その終戦時の体験をふまえて青少年育成を目的として、1947(昭和22)年、36歳の時に香川県仲多度郡多度津町において少林寺拳法を創始した。

少林寺拳法の思想では、拳技そのものの個人的な上達以上に「自己確立」と「自他共楽」の二つを重視して「理想境」・「平和社会」建設を大きな目標としているが、技術面だけではなく、この思想面にも兵要地誌関連の業務に従事した初代・宗道臣によ

る経験の影響が散見される。そこでは石原莞爾の影響(「協和」思想など)も見受けられるが、詳細な検討は別稿に譲りたい。

文献

石井(藤井)素介(2000)『三河紀行素描』、空間・社会・地理思想 5、pp.61-75。

神谷 誠(1995)『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録 岡さのへち会記念文集』、創栄出版。

財団法人・少林寺拳法連盟(1997)『少林寺拳法五十年史』(第1部 正史) 同連盟(非売品)。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(自 明治二十八年 至 同三十九年 断片記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(明治四十年年度記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(明治四十一年度記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

宗 道臣(1977)『少林寺拳法 その思想と技法』、日貿出版社(第16版)。

宗 道臣(1979a)『少林寺拳法入門』、徳間書店(第3刷)。

宗 道臣(1979b)『少林寺拳法教範』、総本山少林寺・日本少林寺拳法連盟(非売品)。

宗 道臣(1997)『初版 少林寺拳法教範』(復刻版) 財団法人・少林寺拳法連盟(非売品)。

宗 道臣(1998)『秘伝 少林寺拳法 禅の源流・中国伝来の護身術』(カップ・ブックス) 光文社(第68刷)。

土肥原賢二刊行会 編(1973)『秘録 土肥原賢二 日中友好の捨石』、芙蓉書房。

中生勝美 編(2000)『植民地人類学の展望』、風響社。

秦 郁彦 編(2000)『日本陸海軍総合事典』、東京大学出版会。

福川秀樹 編(1999)『日本陸海軍人名辞典』、芙蓉書房出版。

藤原 彰 編・解説(1992)『外邦兵要地図整備誌』(十五年戦争極秘資料集 30) 不二出版。

源 昌久(2000)『わが国の兵要地誌に関する一研究』、空間・社会・地理思想 5、pp.37-61。

室賀信夫ほか・水内俊雄 解題(2001)『通称『吉田の会』による地政学関連史料』、空間・社会・地理思想 6、pp.59-112。

2-4 地図資料の用紙劣化対策についての一提言（話題提供）

源 昌久（淑徳大）

はじめに

本稿のタイトルに記載された話題の発端は、つぎの通りである。東北大学所蔵の外邦図中、複数枚あるものはダンボール箱約500箱に収納されている。これらのダンボール箱は資料保存上、問題を有するので中性ダンボールによって作製されたケース（箱）に換えてみてはいかがかという企図から始まった。筆者は、資料保存の専門家ではないが、本研究会代表 小林茂教授からの依頼により、今回調査をし、標題の話題について若干述べてみたい。資料保存の研究者・関係者の視点からみると、おそらく拙稿の内容は常識的レベルであろう。

地図資料（一枚もの）劣化の原因

地図資料は、図書形態の資料と異なり、製本装丁の部分についての劣化問題は生じない。

（1）地図資料そのもの（内部）にあるケース

用紙の酸性化 化学的要因

（2）地図資料の外部にあるケース

- ・ 地図の取り扱い方の不慣れ
- ・ カビの発生
- ・ 生物による虫害等（例えば、シミ）
- ・ 不適切な修理材料（例えば、接着テープ）の使用
- ・ 温度と湿度の急激な変化

- ・ 紫外線その他の光線

（1）と（2）とが複合的に地図資料へ劣化作用をし、進行を早める。

資料保存の原則

原則としては、地図資料原形全体をそのままに保存しておくことである。多くの場合、このことが後で役立つことにつながる。地図資料のデジタル化（媒体変換のひとつ）も考えられるが、それは長期保存にとり難点（例えば、信頼性、コストの問題）を有している¹⁾。

保存方法

- ・ 保存（容器）箱への収納
- ・ エンキャプシュレーション（大型のパウチ）
- ・ 媒体変換
- ・ 専門的保存修復処理（クリーニング等）
- ・ 脱酸化処理

提案

- （1）外邦図の総合目録を編纂し、全国レベルでの重複調査を実施する。一表示区域一図幅ずつ選択する。
- （2）選択された地図で補修が必要な場合、保存修復処理を施す。
- （3）脱酸処理をし、調湿材を付した保存容器に収納する。なお、保存環境（室温 25度 相対湿度 40%）は大事である。

(4) 報告書を作成する。作業に用いた材料、
処置法を今後の保存のために記録する。

補節 ボドリアン図書館 (Bodleian
Library) の保存修補部門を訪ねて

筆者は、昨秋、2003年10月3日に英国
オックスフォード大学 (University of
Oxford) ボドリアン図書館の保存修補部門
(Preservation & Conservation Division)
²⁾(1978年設立)を訪問した。この訪問の
目的は、地図の保存方法の現地調査をする
ことにあった。ボドリアン図書館は英国の
コピーライト・ライブラリーのひとつであ
り、オックスフォード大学の中央館である。
保存修補部門は、マップ・ルーム (1946年
に Map Section 創立) と同じ新館に所在し
ている。保存修補部門補修製本課主任
(Superintendent of the Conservation) ロ
バート G. ミンティ (Robert G. Minte) 氏に
筆者は説明を受けた。保存修補部門は8つ
のセクションから構成され、各々が独自の
役割を果たしている。

(1) 資料の保存状況

本マップ・ルームの書庫に入室し、今回、
保存の観点から地図資料を観察し、説明を
うけた。

書庫内では地図資料 (一枚もの) の保管
は、水平 (横) 置きに保管することを原則
としている。しかし、スペースの問題もあ
り、製本して縦置きにしている場合もある。
地図は水平に収納する専用のキャビネット
(スチール製および木製) に保管されるもの
(一部、垂直式のものもある) や次項 (2)
でのべるような箱に収納されているものも

ある。専用のキャビネットに保管する際、
アルカリ緩衝剤を含んだ間紙を地図ごとに
挟むことはスペースを有するために行って
いない。その代わりに、一番上に収納され
ている地図の上に透明シート袋 (ポリエス
テル製) を置き、それが保護の役目をは
たしている。

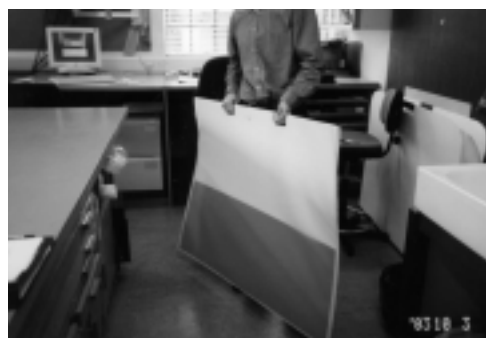


写真1: Map Folder

司書ないし事務員が一枚ものを閲覧室等
に地図を運ぶ際、Map Folder (大型のバッ
グ (写真1)) を使用するとのことであった。
酸性紙や破損した紙への処置も本部門で



写真2: Urauchi 中の地図

対応している。筆者が見学を行っているとき、
作業室の入り口脇に “Urauchi” (裏打

ち・京都の表具師の指導により習得したとのこと)中の地図が据え置かれていた(写真2)。また、壁面には日本製の刷毛が懸けられていた(写真3)。

(2) 保存(保管)箱

マップ・ルームの書庫内では中性ダンボールを使用した各種の保存箱を活用していた。本部門は作業場(Workshop)を備え、保存箱を生産している(写真4・5・6)。外部の業者へ発注する場合もある。その例として、図1のようにロール状の地図を収納する Telescopic Cube Tubes (Conservation By Design limited 製)(図1)があげられる。本製品は筒の長さが 80cm から最大 150cm まで伸びるものである。この他に周囲のサ



写真3: 日本製の刷毛(壁面ボードに懸けられているもの)



写真4: 作業場(1)



写真5: 作業場(2)

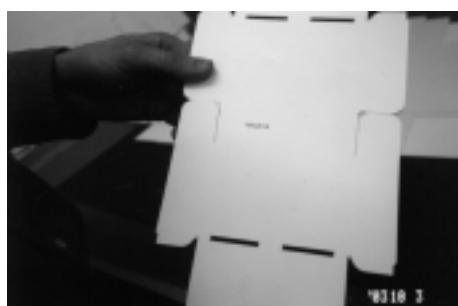


写真6: コンピュータを通じて保存箱に直接、請求記号が印字されている。

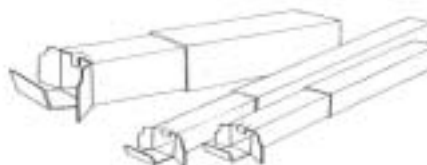


図1: Telescopic Cube Tubes .
出典: Conservation By Design limited
の製品ガイドによる。

イズの異なるものが種々ある。

筆者は大判の地図を収納した保管箱を試みに書架から下ろしてみた。それは予想以上に重量があった。保存箱のサイズ、収納枚数、置く位置等は十分に検討しなければならないと実感した。

注記: 補節の執筆には、2003(平成15)年度淑徳大学学術研究助成費の一部を使用した。

注

- 1) 原資料保存の考え方に近い意見がつぎの新聞記事に掲載されている。『日本経済新聞』2003年12月17日(朝刊)社会面(第44面)文化往来欄「デジタル記録の長期保存に難題」。
- 2) Preservation と Conservation は異なる概念である。Preservation は、資料の劣化を予防するための管理的・財政的配慮を意図している用語である。例えば、資料保存に良好な環境条件の整備。一方、Conservation は、資料の劣化を遅らせ、寿命を引き伸ばす作業(手段)を示す用語である。例えば、紙の脱酸化。

第 4 回研究会

日時：2003 年 11 月 8 日～9 日

会場：駒澤大学

第 4 回研究会は、駒澤大学 246 会館および同大学第一研究館にて開催された。8 日の研究会は、「地理学サロン」との共催であった。また、その間、同大学図書館および地理学教室地図室所蔵（多田文庫）の外邦図の一部を閲覧した。

3-1 終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、 および陸地測量部から地理調査所への改組について (渡辺正氏資料をもとに)

金窪 敏知 (元国土地理院)

外邦図研究会との係わり

外邦図研究会には本日初めて出席して報告を致すことになりましたが、実は今年は私にとって外邦図との係わりが殊のほか深く、今日ここでお話をすることに何か不思議な出会いといったものを感じております。

先ず最初に、「外邦図」の定義ないし概念ですが、『測量・地図百年史』(昭和45年3月、日本測量協会発行)の「第 編外邦図のまえがき」に次のようにあります。

外邦図や外邦測量という言葉は、陸地測量部で満州や中国・東南アジア等を対象地域とした地図や測量に与えた言葉である。

この言葉には、作戦や戦闘行為のために必要な地図を、事前にあるいは戦中に秘密のうちに作成するという意味がこめられていたのであるが、この編では、もっと広い意味でとらえ、台湾・樺太・朝鮮等、かつて外地と呼ばれた旧領土や、その他日本の手で地図が作られたすべての地域の測量と地図を取り扱うことにする。

外邦図や外邦測量の歴史は古く、明治7年に清国渤海地方図と陸軍上海地図を、明治8年に清国北京全図、朝鮮国全図、そして、亜細亜東部輿地図を出版しており、日本国内の近代測量が緒についたかつかぬうちに、もう外邦図作成が始まっ

ているのである。そして明治10年の西南の役で迅速測図班が戦地で地図を作ったように、日清戦争・日露戦争・青島作戦・シベリア出兵・満州事変・支那事変・第2次世界大戦にはいずれも臨時測図部や臨時測量部、あるいは派遣測量隊や軍測量隊などが編成され、外邦図の作成に当たっている。

明治17年の参謀本部地図課の服務概則、総則第5条に「第3班外邦図及臨時指令ニ応スル地図、図書ノ調製ヲ掌ル」とあるように、こうした国外の地図を外邦図と呼ぶこともかなり古くから行なわれたようである。

このような概念による外邦図の作成範囲は、台湾、樺太、朝鮮、南洋諸島(委任統治領)、満州および関東州などの全域、その他中国、蒙古、シベリア、東南アジア、印度、ニューギニアおよびニューブリテン島、ソロモン諸島・ニュージーランド、ハワイ諸島、アラスカ地方、オーストラリア等に及んでいます。縮尺は、5万分1、10万分1、20万分1、25万分1、50万分1、100万分1等でした。

私は現在岐阜県図書館の特別顧問をしております。ご存知のようにこの図書館には世界分布図センターという機構があって、東北大学から譲り受けた外邦図一式を取り揃えており、また最近、建築家である山下和正氏の古地図コレクションを受け入れて

おります。私も山下氏に倣って、コレクションというほどではありませんが、長年自然に集った主題図等の地図類を死んだら寄附しようかと考えて、ぼつぼつ整理を始めているところです。私の持っている外邦図は、約 35 年前に国土地理院の製図課長補佐をしていた当時、大掃除で棄てられようとした作業用の地図を貰い受けたものが主体で、約 300 点あります。小縮尺図を編集するために計曲線を選んで墨入れをしたもの等を含めて、複数部あるもののがかなりあり、実質的には 194 図葉です。

次に、今年の 5 月中旬に目黒区にお住まいの佐藤礼次さんという方から分厚い封書が届き、中に A4 横書き 60 枚ほどの原稿が一式はっていました。国土地理院に勤めていた小林弘氏の紹介ということでしたが、佐藤さんはやはり国土地理院に勤めていて亡くなられた村上成夫氏の甥に当る方で、また、成夫氏のお父さん、すなわち佐藤さんのお祖父さんは、村上千代吉と言って陸地測量部の職員であったそうです。10 年近く前に、この村上千代吉氏の残した手帳が 32 冊出て来たのですが、これが明治 38 年から昭和 13 年まで 33 年間におよぶ千代吉氏の主として外邦測量に関する活動記録でした。佐藤さんはこの手帳の解説をかねてより知人の牛越国昭氏に依頼していましたが、このほどようやく牛越氏による原稿という形でまとまったので、目を通して欲しいということでした。

原稿を読みますと、村上千代吉氏は明治 38 年に陸地測量部に採用され、直ちに朝鮮に派遣されて測量を行ったのを皮切りに、南清、北清、蒙古、シベリア、山東、満洲など、各地の測量、時には秘密の測量

に従事しております。明治 40 年には現地で逮捕されて危うく殺されかけたこともあります。すなわち、この 32 冊の手帳は外邦測量に従事した人々の苦勞を切実に物語る記録ですが、何れ出版して公表される予定と伺っております。

続いて 5 月末に、日頃親しくして頂いている自衛隊 0B の高木勲氏からご相談を受けました。それは今日お見え頂いておりますが、終戦当時大本営参謀であられた渡辺正氏から自分が保存している資料を整理して、然るべきところに納めたいというご依頼を受けたのであるが、内容をみると、自衛隊と国土地理院とに分けて納めたらどうかと思い相談にきたということでした。渡辺氏は陸軍士官学校 49 期生、高木氏は 58 期生、私は仙台陸軍幼年学校の 48 期生で（渡辺氏に言わせれば半玉ですが）陸士 63 期生相当であり、いわば大先輩にあたる訳です。約 50 点の資料には実に驚くべき内容の記録が多く含まれており、早速資料整理のお手伝いをさせて頂くことになり現在に至っております。

また、7 月には沖縄県宜野湾市でアジア太平洋地域地図会議が開催されました。そしてこれに付随して、地球地図フォーラムや日本国際地図学会の大会が開かれ、私も学会に参加しました。外邦図研究会の存在は事前に清水靖夫氏から伺っておりましたが、沖縄の学会で小林茂先生の「外邦図研究の成果と課題」と題する発表をお聞きし、若干のコメントを差上げたのが切掛けでお近づきになり、ご依頼によりこの外邦図研究会でお話をする事になった次第です。

渡辺正氏資料について

後で改めてご紹介申し上げますが、渡辺正氏は、昭和19年5月から昭和20年9月終戦による復員まで、参謀本部陸軍参謀・大本営参謀陸軍少佐として、情報担当の第二部に所属し、主として第二部第四班において、情報に関する総合情勢判断、兵要地誌、および陸地測量部の管轄を担当されました。

渡辺正氏が保存しておられる資料は、以下通し番号を付けて渡辺氏資料と呼ばさせていただきますが、その内容はおよそ次の通りであります。

- (1) 大東亜戦争末期に本土決戦に備えて計画実施された兵要地理調査研究会に関する資料
- (2) 終戦前後における地図等の焼却処理ならびに陸地測量部組織の処理に関する資料
- (3) 戦後進駐軍との折衝に関する資料
- (4) 兵要地理および地誌に関する資料
- (5) その他

進駐軍との折衝に関する資料には英文が含まれています。

本日私がこれからお話しする内容は、渡辺氏のお許しを得て、主としてこの渡辺氏資料ならびに直接ご本人からお聞きしたことに基くものであることを、先ずお断り致します。

兵要地理調査研究会について

大東亜戦争末期に本土防衛を万全なものにするために、渡辺参謀の発案で著名な地理学者を糾合し、命題別に期限を限って兵要地理調査研究を実施することになりました。

た。この調査研究会の発足に先立って、一つの委員会が設置されております。その名称は審らかではありませんが、この委員会の第二回会合の資料が残っています。すなわち、昭和19年12月15日(金)丸ノ内ホテルで開催され、参集者は委員18名、議題は、研究項目確定、執筆者の決定、研究会の運営および委員の分担決定、その他となっています。委員会の構成は、地理、歴史、社会、思想、政治、法制、経済、文化、外交、軍事と、幅広い分野に関する学者および専門家となっております。地理の委員として、多田文男、渡辺光のお二人の名前が載っております。なお、この文書によりますと第一回会合は12月6日(水)に開かれたようですが、詳細は不明です(渡辺氏資料4)。

この頃戦局は日に日に我が方に不利になって来ており、11月にはサイパン基地からB29が本土来襲を開始、明けて昭和20年には米軍は1月にルソン島に上陸、更に2月に硫黄島に上陸、守備隊は3月に玉砕しました。このような情勢にあって、大本営は1月20日に本土決戦に関する作戦大綱を決定しています。

参謀本部の中では、「今更兵要地理なんか」という声もあったそうですが、第一回の兵要地理調査研究会は昭和20年4月30日(月)牛込区市ヶ谷の参謀本部第二部で開催されました(渡辺氏資料1、2、3)。沖縄に米軍が上陸して死闘が続けられている時期であります。研究会の参集者は、参謀本部側が第二部長の有末精三中将(陸士29期)以下、第四班、第五課、第六課、第七課の各課長および班長、関係部員で、地理学者は15名が集りました。議題は研究題目の検討および担任決定でした。

このときの人選は、渡辺参謀が当時東京帝国大学理学部助教授で資源科学研究所員を兼ねていた多田文男氏に相談して、先ず東京帝国大学辻村太郎教授、次いで東京文科大学田中啓爾教授が選ばれ、以下、陸軍予科士官学校、陸軍気象部、内務省国土局、文部省国民教育局、東亜研究所、東京帝国大学、東京文科大学、東京高等師範学校、学習院の各組織に所属する地理学者が集りました。なお、このあとの会合では、京都帝国大学からも参加しております（渡辺氏資料5）。

余談として、中野尊正教授が著書『山河遙かに』に書いておられますが、多田文男氏の推薦で中野氏もこの兵要地理調査研究会の一員となる筈だったそうです。中野氏は資源科学研究所員で、内蒙古や熱河の調査をされた経験がありますが、昭和19年5月に応召で高知の聯隊に入隊し、直ぐに満洲の虎頭、次いで東安で警備に当っておられました。多田氏の推薦を受けて渡辺参謀が中野氏を参謀本部に呼ぼうとされたときは、久留米の予備士官学校に入校された後だったので、沙汰止みになったということでした。

兵要地理調査研究会では、研究題目が個人ごとに細かく分担を定められ、研究成果の提出期限は、一部中間報告の作業を含み、昭和20年5月13日とされました。その成果は現在残されておりませんが、完成資料目録によれば、次の通りです。

- (1) 本土二於ケル上陸適地トシテノ砂浜概況
- (2) 本土周辺主要島嶼ノ調査
- (3) 海岸地形ノ特質概況
- (4) 内陸機動價値判断図

- (5) 食糧関係資料
- (6) 活用可能道路網図（間道）
- (7) 隔海度図
- (8) 米英「ソ」ノ東亜政策の究明
- (9) 帝国本土二於ケル要域觀察判断

参謀本部からは、これらの成果に対する謝礼金として合計3500円が昭和20年8月に支払われ、その予算は第二部第六課から支出されております。

兵要地理調査研究会の成果の一つとして、仮に米軍が関東地方に上陸作戦を行うとすれば、九十九里浜か相模湾かが議論され、研究会は相模湾という推定をしました。参謀本部の中では九十九里浜説が多かったそうですが、戦後になって米軍に質したところ、相模湾を考えていたそうです。

陸地測量部の松本疎開

次に陸地測量部に関するお話ですが、参謀本部に所属していた陸地測量部の庁舎は三宅坂にありました。以下『測量・地図百年史』に拠りますと、戦争末期における主要業務はいわゆる「マルタ」作業といわれるもので、本土決戦に備えて大縮尺の測図や修正および地図上に距離方眼を入れたり、水深線を描画したり、その他作戦に必要な事項を描入する応急修正図作成作業でした。

昭和19年戦局の悪化に伴って東京の疎開が始まり、陸地測量部も4月にまず東京杉並区の明治大学予科の校舎に移りました。この頃から兵要図量産のため地図印刷を民間会社に外注し、緊急作業隊を編成して監督を行っております。

昭和20年に入ると、各測量班も測量どころではなく、東京も空襲が激しくなったの

で、5月に長野県松本市郊外へと第2次疎開が決められましたが、不幸にして、5月24日夜の空襲で当時新宿駅にあった疎開荷物が貨車ごと炎上し、多数の貴重な資料を失いました。また、20万分1帝国図の銅原版は三宅坂庁舎印刷工場の廊下に並べられたまま、たった一日の輸送の遅延のためにその殆んどが灰燼に帰してしまいました。

長野県の疎開先では、総務課と第三課(旧製図科)の製版と印刷が波田村、第三課の製図関係が梓村、第一課(旧三角科)と第二課(旧地形科)が塩尻、教育部(旧修技所)が温明の、各国民学校に分散配置されていました。当時陸地測量部の編成人員は将校・高等官84名、下士・判任官290名、生徒125名、雇傭人524名、その他召集軍人・徴用工が多数配置されていました。

なお、製版および印刷関係は梓村尾入沢に半地下の工場を作る計画でしたが、終戦で作業が中止になりました。また別に岐阜県高山市に印刷工場の再疎開の計画がありましたが、これも終戦で工事が中止されています。この辺の経緯については、陸地測量部第50期生で第三課所属の技手であった大井淳氏の記録(『想 陸測第五期生徒之記録』、平成2年6月、むさしの地図株式会社発行(非売品))に詳しく載っています。なお、陸地測量部疎開のため先遣隊として現地に向った一行の中に、伊理中佐の名がありますが、この方は伊理仁一工兵中佐で、伊理正夫教授(中央大学理工学部、東京大学名誉教授/情報システム工学)の父君に当たられます。

終戦に伴う書類(地図を含む)の焼却について

ポツダム宣言の受諾、そして終戦に伴い、昭和20年8月15日付で「陸軍秘密書類其ノ他重要ト認ムル書類(原簿共)」の焼却命令が参謀総長名で発せられました(渡辺氏資料6)。ここでいう「其ノ他重要ト認ムル書類」には地図、兵要地誌を含んでおります。続いて8月19日付で「作戦用地図処理要領」の通牒が発せられ、細部にわたる指示が行われました(渡辺氏資料8)。指示の内容はおおむね次のようです。

- (1) 参謀本部においては、内邦地形図のうち軍事極秘である2万、1万、5千分1図、および満洲、「ソ」領、関東州の10万、5万、2万5千、5千分1の軍事極秘以上の地図ならびに各地域の兵要地誌図は焼却する。また、内邦地形図のうち軍事極秘(戦地に在りては極秘)および軍事秘密(戦地に在りては極秘)である5万、2万5千分1図は一部残置し焼却する。
- (2) 部隊、官衙、学校においては、参謀本部に準じるほか、三角点成果表および2万分1以上の実測図(築城・射撃のための測図を含む)は焼却する。
- (3) 陸地測量部においては、原図、初刷、三角点成果表は成るべく保管する。原版はそのまま残置するが、ただし軍事極秘である2万、1万、5千分1のものは焼却または破壊する。印刷機、資材等は残置する。ただし一部のレンズは保管する。資材のうち所要のものは職員に貸与支給する。
- (4) 民間印刷会社においては、印刷した5万分1地形図および20万分1帝国図は印刷会社に貸与する。用紙、薬品、

亜鉛版等は陸測主任者と経理上の協議(例えば印刷費を該資材によって現品払いをするような)の上印刷会社に交付する。

原図原版等処理区分表によれば、樺太、朝鮮、台湾、満洲、シベリヤ、支那、南方に関する原図、原版は焼却、初刷(印刷図の第1号)は秘匿、また、地図(印刷図)はシベリヤ、支那、南方に関するものを焼却、となっています。

以上のような指示に従って、直接作戦に関係する軍事極秘の大縮尺図等は焼却されましたが、指示対象外の地図類はこの限りではありませんでした。ただし、最初の8月15日付の命令に従って焼却されてしまったものもかなりあったと思われます。

陸地測量部から地理調査所へ

終戦という未曾有の事態に直面して、陸軍部内にも大きな混乱がありました。森越近衛師団長の殺害事件、玉音録音盤奪取未遂事件、阿南陸相の自刃や宮城前その他における割腹事件などが相次ぎました。

このような情勢にあって、陸地測量部の管轄担当であった渡辺参謀は、陸地測量部の将来について憂い、終戦の翌々日の昭和20年8月17日深夜密かに「終戦に当り陸地測量部処理要綱案」という意見具申案を作成して、上司である第二部長有末精三中将に提出しました(渡辺氏資料7)。すなわち、「終戦に伴い陸軍は解体されるが、陸地測量部は国土復興のための必須機構として、平時編成の官庁に移管し、米軍の進駐時には既にその機関があることを認識させ交渉させるべきである」との考えから、陸地測

量部は速やかに陸軍の組織から内務省へ移管することを具申しました。

意見具申案の内容は、本日の報告の核心に当たりますので、その全文を読ませて頂きます。〔意見具申案〕

意見具申案の切々たる文章は、眞に心を打たれるものがあります。30歳前の青年将校が国家未曾有の混乱のなかにあって、冷静さを失わずに発揮された並々ならぬ愛国心、透徹した判断力と優れた実行力に、今日余慶を受ける者の一人として心から敬服するものであります。

意見具申案を受けた有末部長は了承して一切を渡辺参謀に任せました。早速行動に移った渡辺参謀の意見を容れて、若松只一陸軍次官と内務省の岩沢忠恭国土局長との間で協議がまとまり、公式に陸地測量部を陸軍から内務省に移管することが決定され、昭和20年8月30日付で内務省官制が改正になり地理調査所の設置が決定し、同日「陸地測量部条例」が廃止されて陸地測量部は消滅し、9月1日内務省地理調査所が暫定的に3課制(企画・測量・地図)により発足したのです。

新組織である「地理調査所」の名称は、渡辺参謀の発案になるもので、その発想の元は「兵要地理調査研究会」にあるということです。そして、地理調査所の表札は、書をよくされる渡辺正氏の直筆になるものです。

地理調査所の発足に伴い、陸地測量部長大前憲三郎少将始め軍人の主要幹部は退任し、地理調査所長には民間人を当てることになりました。その人選に当って、渡辺参謀は陸地測量部教育部の武藤勝彦技師に就任を促しましたが、武藤氏が当初これを

拒んだので、地理調査所の初代所長には国土局長の岩沢氏が兼ねることになり、岩沢所長の下に、企画課課長鈴川清（元陸地測量部第一課課長陸軍大佐）、測量課課長武藤勝彦、地図課課長馬瀬口久平（元陸地測量部第三課課長陸軍中佐）という編成で発足しました。武藤氏の所長就任は昭和 20 年 12 月のことです。昭和 23 年 1 月になって渡辺光氏が武藤所長の招きで企画課長に就任しています。

終戦直後、進駐軍将校による陸地測量部の視察が行われました。この時に疎開先に只一人同行された渡辺参謀の並々ならぬご苦心の程は、信濃毎日新聞の記事でご承知のことと思います。この時にも岩沢国土局長が現地に手配をして便宜を図るよう様々な配慮をされ、側面から渡辺参謀を援助されたと伺っております。

外邦図の国内搬出に関連して

外邦図は、内邦図とともに終戦後国内に搬出頒布されました。外邦図研究会による追跡調査で明らかにされたように、特に参謀本部に所蔵されていた外邦図は、資源科学研究所、東京帝国大学、東北帝国大学（何れも当時）等に搬出されました。昭和 20 年 9 月当時、地図類に関する残務整理に当たっておられたのが渡辺正参謀でした。資源科学研究所所員で東京帝国大学理学部助教授であった多田文男氏は前記兵要地理調査研究会の一員およびそれに先立って組織された委員会の委員であり、東京帝国大学理学部助手であった木内信藏氏もまた研究会の一員でした（渡辺氏資料 1～5）。また、東北帝国大学の田中館秀三教授は、厚木で進駐

軍の先遣隊代表アイケルバーガー中将与日本軍代表有末精三中将が会見したときに通訳を務められた方でした（岡本次郎：地理学教室創立の年、東北大学理学部地理学教室開設 50 周年記念誌、1995 年 6 月、東北大学理学部地理学教室同窓会発行）。参謀本部からの地図搬出が順調に行われたのは、以上のような参謀本部と地理学者との緊密な人的交流、特に兵要地理調査研究会の存在があった故と理解されます。

私事ですが、昭和 28 年に私が東北大学を卒業して建設省地理調査所地図部企画課に採用されたときの直属上司が、所長武藤勝彦、地図部長渡辺光、企画課長補佐中野尊正の方々でした。これも不思議な因縁で結ばれたものと感慨無量なものがあります。

以上で私の報告を終わります。ありがとうございました。

3-2 私と外邦図

三井嘉都夫（法政大学名誉教授）

私と資源科学研究所、法政大学、多田文男先生、田中館秀三先生との関係

私は1941（昭和16）年、法政大学高等師範部に入学しました。私の所属した高等師範部というのは夜学でありまして、地理・歴史科として設立されましたのは1937（昭和12）年でありますから、私が第5期生として入学したのはちょうど日米戦争の始まった年であります。地理学科は当時東大の地理学科の多田文男助教授を始め秋岡武次郎、渡辺光、岡山俊雄、新井浩といった先生方が兼任教授として教鞭をとって下さいました。ここで私は先ず最初に多田先生と出会うことになりました。戦争中は学業年数も短縮され、本来なら3年間1944（昭和19）年3月に卒業すべきところ短縮され、1943（昭和18）年9月卒業となりました。

ところで資源科学研究所と申しますのは、1941（昭和16）年12月8日の開戦記念日に、当時文部省の直属の研究所として青山の高樹町という所に設立されました。瀟洒な建物で、部門は地理、地質、動物、植物、人類といった分野でありました。私は、法政大学は夜学ですので昼間仕事が出来るといふことで何処か良い所が無いものかと探していましたら、ちょうど多田文男先生（先生は資源科学研究所員として東大との兼務で地理部門の主任として勤務しておられました）が、誰か資源科学研究所の職員にならないかと誘われ、1942（昭和17）年に

私は資源研に入所致しました。同年12月8日の一周年記念式典の壮大に実施されましたのも昨日の様に記憶しております。ところが戦況が厳しくなり、1945（昭和20）年5月には、高樹町の資源研は空襲で焼かれてしまいました。私は、1944（昭和19）年6月、1日教育招集という名のもとで名古屋へ参り、庄内川のほとりにある部隊で2ヶ月間無線の教育を受け、その年8月から翌1945（昭和20）年終戦を迎えるまで知多半島の太田川のほとりにある横須賀で無線兵として勤務し、その年の9月末に復員し、一旦郷里の富士市の実家に帰り、多田先生の呼び出しにより上京し、東京では住む所が無いので多田先生のお宅に御厄介になることになりました。まさに住うに家無く、食べるに米無く、着るに着物なしの時代に本当に多田先生には御厄介になったと恐縮の気持ちでいっぱいです。その多田先生も1978年3月15日に亡くなりましたが。

さて外邦図に係りのある資源科学研究所は、焼野原の新宿区百人町にあった旧陸軍の技術研究所跡の建物を一つ受け、但し、設立が開戦の1941（昭和16）年12月8日であり、軍に協力したとして、GHQの指図で文部省の直属から離され、助成金でやっていく事となったのであります。そして1971（昭和46）年3月を以って、最早戦後は終わったという名のもとに閉鎖されました。しかしその活動の状況は、1943（昭和18）年3月に出版された資源科学研究所彙報第

1号から1971(昭和46)年第75号(終刊号)までの研究報告その他の活動成果からも資源科学研究所の実態を良く知ることが出来ようかと思えます。まさしく研究員の月給は世の人の半額程度で苦しい生活を強いられて来ました。しかし研究員同志は親しく、よく勉強致しました。少し余分な事かとも思いますが、私のように居候している者は別として、家の無い人は研究室に寝起きしていた者が多かったのであります。私も多田先生の家から失礼した後は研究室の一部に住み且研究を進めていたこともあります。他人事で恐縮ですが、地理学研究室の某研究員などは結婚しても住う家無く、地理学研究室の大きな地図台の上で奥様と休み、私等が朝早くその部屋に入ろうとするとまだ二人は休んでいるような時もありました。しかしその後、研究所の屋敷内に焼け残った旧将校さんのバラックに既婚者4世帯(1世帯小さな1部屋)入れて貰う事が出来ました。私も結婚したのでその一部屋を借りる事になりました。この点は後にも申しませんが、いわゆる外邦図の監視には都合良かったとも考えられます。

さて法政大学文学部地理学科は、1947(昭和22)年旧制の大学令に基づく学科として誕生し、夜間みの授業が開かれました。教授は野口保市郎教授、多田文男教授、岡山俊雄教授、新井浩教授、兼任教授として渡辺光先生等が居られました。私はこの段階で又多田先生に御厄介になり、指導教授をもお願いした次第であります。翌1948(昭和23)年には別紙記載の田中館教授が法政に迎えられ地理学科の主任教授となりました。

私等は主として田中館教授からは陸水学

などに関する講義をとくと承りました。ところで私は1950(昭和25)年卒業するや地理学科の研究助手に採用され、昼は資源科学研究所、夜は法政大学と一人二役の勤務を続けていました。田中館先生と、いわゆる外邦図の件についての話などは無かったが、地図の重要性は何時も強調されておりました。東北大学に移送された外邦図の移送に関しても田中館先生も力を入れておられたと浅井先生の書き物やその他の方々の報告からもわかりますが、なる程と理解されるような気が致します。しかし田中館先生は1949(昭和24)年6月病を得て新宿区新大久保の山手病院に入院され、1951(昭和26)年1月29日遂に逝去されてしまいました。享年66歳でした。

私と外邦図の関係

さて、資源科学研究所内の外邦図の整理、分配等に関しましては、浅井辰郎先生、中野尊正先生が詳細に書かれておりますので¹⁾、復員して帰って来た私は、多田文男先生のすすめにより市ヶ谷の旧陸軍参謀本部(現自衛隊市ヶ谷駐屯地)内に保管されていた外邦図の運搬移送についてその一端を聊か記してみたいと思います。浅井、中野先生も書かれておりますように、多田先生からの話では、渡辺少佐から市ヶ谷の参謀本部の地下室にある地図を学术研究の為に使ってほしいので持ち出してはとの事でありました。先にも述べました様に私は復員して上京し、多田先生宅に御厄介になり、新宿区大久保百人町の資源科学研究所に復職し、まだ纏まった仕事の明確にならない時でありましたので地図蒐集も面白からうと

思っておりました。早速参謀本部の地下室に入ってみますと、あるやある世界の地図と日本の地形図類が夫々の棚の上に乗っているのには驚いた次第であります。このような地図をどのように分類し、どのようにして運んだらよろしいかと最初迷いました。同じ図だけを沢山持ち出しても意味ないので先ず必要な地図を 10 部ずつ別々に集積して、後日運び出す事にしました。地図は面白いので分類中に地図を読んだりしていると時間がかかること大変なものでした。特に沖縄の 2 万 5 千分の 1 地形図、空中写真の原図の様な物まで出て来て、聊か感心した事なども忘れ難い思い出です。参謀本部での分類にどの位の時間をかけたかは忘れてしまいましたが、浅井先生も書かれております様に仕分けは出来たものの大量の地図を運び込むスペースが無い。新資源科学研究所に決まるまで、最初は大妻女子大学の倉庫に入れていただいたが、車が無いので肩に担いで毎日参りました。なお長く借りておくわけにも行かないので、次に、明治大学の倉庫を借りて保管するようになりました。この時は大八車を使って運び込んだ事も忘れ難い思い出となっております。大久保百人町の資源研は、米兵が毎日監視役の様に 2~3 人来ていましたのでなかなか地図を運び込む段取りが難しかったのであります。いよいよ資源研の地下室に集積するまでには、焼け野原に建てられたバラック小屋、金子材木店の一部に入れていただく事もお願いした次第です。とにかく資源科学研究所へ決まるまでには 3~4 回転々としたわけでございます。

資源科学研究所におさまるまでにはかなりの時間を要し、終戦の翌年位まではかか

ったと思い出されます。浅井先生も書かれております通り、資源科学研究所に運び込まれた膨大な地図は、一部は 2 階の廊下にある天井まで届く大戸棚に詰まっていたが、大部分は半地下室に埃をかぶったままになっているという状況でありました。この半地下室には先にも述べました様に何人かの研究員が寝起きしていたという状況でありました。浅井先生が 1948 (昭和 23) 年資源研に就職し、この地図に眼をつけられ、本格的整理が始められたのは 1959 (昭和 34) 年からでありました。浅井先生は法政大学の地理学科の学生をアルバイトとして頼み、膨大な全地図から 1 枚 1 枚を抜き出して国別、縮尺別、図番号別に集めるという作業に入り、その最も多く集まったものを A セット (15,857 枚) 次に多いものを B セット (10,338 枚) というようにして T セットまで計 20 組を作られました。これらの整理に尽力された当時学生であった飯田貞夫君 (現茨城キリスト教大学教授) 松永澄江 (現姓安岡) さん達の御努力には言葉に尽くしきれないものがあります。今でも飯田君はお目にかかると当時アルバイトしていた時代のお話をよくされます。

さてこれらの地図は浅井先生も書いておられますように、最初アメリカの目を恐れて隠匿されつづけましたが、1951 (昭和 26) 年に「サンフランシスコ平和条約が締結されたので、もうそろそろ動かしてもよろしかろう」という多田先生の御意見で、最初整理に着手されましたのは、1953 (昭和 28) 年頃、私やアルバイトの学生等の手で、国別、縮尺別に一部が整理され、大部分は未着手でありました。先にも述べました様に本格的整理に入りましたのは「立教大学ア

「アジア地域研究施設」が1959(昭和34)年に出来、地図を購入して下さることになって始まったものであります。

斯様にして大量の地図はその後「お茶の水女子大学への移管」と題して浅井先生が書かれているのもその通りであります。なおBセットの10,338枚は1971(昭和46)年～1976(昭和51)年にかけて京都大学東南アジア研究センターに納入されましてと浅井先生は申されております。なおC以下の各セットは、地域を一部限定された機関もありましたが、Cが立教大学アジア地域研究施設、Dが広島大学地理、Eは東京大学地理、Fは京都大学地理、他にドイツのルール大学、中国研究所、大阪大学(複写フィルム)、筑波大学、熊本大学など多くの研究機関に納入され、L以下の一部は資源科学研究所の地理関係者にも贈られ、後の僅かな残りは浅井先生宅に保管して今も頒布中であると先生は申されています。以上6万5000枚から10万枚近い地図が分配されているといえましょう。

注

- 1) 中野尊正(1990)『山河遙かに』私家版, 16頁. 浅井辰郎(1999)「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」清水靖夫・浅井辰郎・小林茂・安里進『大正・昭和 琉球諸島地形図集成・解題』柏書房, 23-26頁.

3-3 外邦図と私とのかかわり

中野尊正（東京都立大学名誉教授）

[編集者のまえがき]

以下は、中野尊正先生（東京都立大学名誉教授）に対し、その外邦図とのかかわりについておたずねしたところ、お書きくださったコメントをまとめたものである。

すでに中野先生は、その著書『山河遙かに』（私家版、1990）で、終戦直後参謀本部から外邦図の運び出し作業に従事したことを書いておられる（16頁）。この記述は、田村俊和「地図を生かす：公開された旧軍用地図を例に」（東北地区大学放送公開講座テキスト委員会編『東北大学の宝物：総合学術博物館への招待』東北大学教育学部附属大学教育開放センター、1998年、94-102頁）さらには浅井辰郎「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」（清水靖夫・浅井辰郎・小林茂・安里進『大正・昭和琉球諸島地形図集成解題』柏書房、1999年、23-26頁）に引用され、すでにひろく知られるにいたっていた。ただし、上記記載はあまりに短く、現在お茶の水女子大などに所蔵されている外邦図の来歴を追跡するには、上記作業の前後関係や具体的内容について、さらに詳しい証言が必要であった。

これらの点について、小林がおたずねしたところ、中野先生からは前後2回のメモをいただいた。1回目は、2003年10月24日付の手紙に付されたもので、主として経過についてふれている。2回目は2003年11

月13日で、これを補足するお手紙をいただいた。

以下では、これら3点を集成したものをご覧いただき、修正していただいたものを掲載する。なお上記3点のメモの中心は外邦図研究会で配布されたもので、これを軸に集成をおこなった。

なお、中野先生は、その後『人間環境調査余滴』（2004年、私家版、全78頁）を出版され、その末尾に「外邦図あれこれ」（72-78頁）を掲載されている。この文章とかさなる点もあるが、外邦図が大妻学園に搬入されるに至ったのは、中野先生の個人的な知人関係によること、外邦図の利用に関する提言など参考にすべき点がすくなくない。

はじめに

小林さんから示された課題は下記3点などである。

- ・ 終戦前後の状況
- ・ 渡辺少佐と中野の関係
- ・ 外邦図とのかかわり

終戦前後の状況

台湾生まれの台湾育ち、台北高校山岳部中心の活動のなかで、部室に整備されていた陸測図、台湾総督府図、蕃界図は登山その他に活用。一部、海岸地形について、

岩波の科学の拙論¹⁾のように、多少、学習的な使用(1940)。

大学では多田先生のアジア地誌、村田先生の遼東半島の地形図作業など、外邦図の周辺部ともいうべき勉強をさせられた。就職は水路部、病気(中耳炎手術)でこれはダメになり、同期の魚住が水路部 予備学生 航空参謀と活躍、山本五十六と同じ戦闘で戦死。同じく大槻文彦²⁾の孫、高彦は北支で貫通銃剣で戦死。軍とか地図特に外図の地図への関心は高かった。

地理調査所に転じてから知ったことだが、昭和17年図式で、例えば飛行場など擬装した。世界のどの国でも行われるし、意図的でないにもかかわらず、写真測量に中心をおくようになって判読ミスが増えている。

昭和18年ごろから、地形図の入手が困難になった時、満州の新地形図を三部自費で購入、その一セットは戦後、満州史の神田信夫(明治大学)の研究のため提供、彼は学士院賞を受けた³⁾(四ツ谷駅から上智大学へ行く道路端の小林の店で購入)。

に関連した調査の一部は公表されている。例えばオールドス。昭和18年、現地に入城できなかったとき、包頭で入手、一部を抽出したものがオールドスの中国移民分布を示す地図(原図の精度が悪いので縮小すること)。

当時の民国地形図のコピーは多田先生に頂いて、内蒙古調査に使った。等高線がウズ巻。文献から中国内陸の隊商ルートを図化(三井先生の協力)。

内蒙古や熱河では歩測等でみずから作図。興亜義塾⁴⁾の学生にも短期間で訓練をした。作品の出来栄はバラツキがあった。

渡辺少佐との関係

大学卒時に海軍水路部、これが病気でだめになり、資源研に拾われた。資源研助手として勤務中、応召で高知の連隊(本籍高知市はりま屋町)へ入隊(昭和19年5月)、直ちに東満(虎頭、虎林、東安)に転属、対戦車の連射砲の初等兵として訓練を受けた。東満、東安と転戦。戦況不利とは軍隊内では分からず、技術の幹部候補生の試験を受け、技術ではなく兵科の幹候生(特別甲種幹部候補生、通称特甲幹)として久留米へ転属(昭和19年10月)。この制度は1回のみで、後にも先にも特甲幹といえば我々の久留米、仙台などだけである。その頃、東満の牡丹江に東大地質(出身)の久野(久)さんがいた。彼は幹部候補生の試験の時(面接口頭試問のみ)の1人。質問は「満州の地下資源を問う」一問であった。遠藤さんの本を読んでいたので要点はもれなく述べた。満州では連射砲、久留米では重機関銃。このころまで渡辺少佐とは全く接点はない。

久留米に転属になったころ、渡辺少佐が私の参謀本部への転属を満州に手配されたと理解している。この件には多田先生の意向が反映しているとも考えている。この点は、私が初めて渡辺少佐にお会いした戦後9月下旬に直接話を聞いた。

技術ではなく、兵科に、試験も受けないうで廻されたのは、原隊での兵科の成績がバツグンによく、幹候生として久留米に転属になった時、連隊の一番。ただし、引率者はひとつ階級の上の佐藤(デビスカップの選手)。福岡で彼の相棒は中牟田(岩田屋

デパートの社長の息子)。社長宅でとっておきの泡盛をごちそうになった。兵科一番の成績になったのは、連射砲の砲身を一人でかついで走ったり、砲身を支える台座揺架を2人でかついで走れる兵隊は当時いなかったことが関係する。この馬鹿力が外邦図運び屋に活用。馬鹿も使しよう。

久留米入校後、消燈後に中隊長(小熊)に呼ばれた。中隊長はノモンハンの敗戦隊長の小熊少佐(戦後、週刊誌で有明海沿岸で漁師をしているとの記事を見た)。この席で、このままでは日本は敗戦、情報勤務希望を述べた。この前半には中隊長は賛成せず、学校長にも報告したようであるが、この点について後日、教官の一人が私に耳打ちしてくれた。学校長は、この男は見どころがあるので置いておけということであった。この学校長の意見に、渡辺少佐の配転手配が関係があったかどうかは不明。

学校卒業の時、中隊長は訓示のなかで、中野のような人間がいるから日本は負けると述べた。中隊長の発言のとおり日本は負けた。負けた後、幹候の同窓会の席、元中隊長は君達のような人間が頑張る日本は発展してきたと述べた。「君達のような人間」のなかの一人が中野である。

昭和20年の8月、小生は旅団司令部の参謀付将校をしていたが、ここで、旅団正面に敵前上陸の可能性ありやと特命の調査をすることになり、「なし」と断定した。この特命は参謀本部から各地に出されたものと考えている。

外邦図持ち出しとのかかわり

枕崎台風の被害と広島の被爆のため

(九州からの)復員はおくれ、帰京したのは9月末か10月はじめ(正式には10月1日復員復職)。翌朝、帰任のあいさつと今後の仕事の指示を仰ぐため、井之頭線で多田先生のお宅へ伺った。

多田先生は、参謀本部の渡辺少佐のところに出向いて、地図の運び出しをしてくれと指示された。そこで、渡辺少佐に生まれて初めてお目にかかった。上述の渡辺少佐の影はいよいよはっきりしてきた。

初対面の渡辺少佐は、「中野君ですか。参謀本部への転属の手配をしたが、すでに久留米に出発していて実現できなかった」といわれた。これで、信濃毎日⁵⁾の記事に私の名が記されている理由が判明した。

案内された倉庫で10枚+1枚(中野の分)を各図について、別に集積した。明治大学にも少しあるのでそれも運び出して良いといわれた。市ヶ谷の作業を終えた後、明治大学の正門に入って本館の左側の事務室の前の廊下を少し左に進み、階段を下りたところの倉庫、大学の事務員が案内してくれた。この事務員は特命を受けている管理職のように思った。ここの作業は量も少なく、すぐに終了した。

選別作業は市ヶ谷と明大で1週間か10日位だったと思う。作業中他人が出入りする事はなく、私1人で、6トントラック平積み1台分をさばいた。明治には渡辺(操)、岡山(俊雄)両先生がおられ、よく存じ上げていたが、渡辺先生はまだ復員されていなかったかもしれない。岡山先生にはこの作業の帰途、四ツ谷駅下り急行ホームでパツタリお会いした。地図の件は何も話さなかった。

選別した地図の運搬先がない。資源研

(百人町)はまだ使えないらしかつと今は考えている。どこかあてはないかと多田先生。運び屋でも不動産屋でもないのですが力持ちの私も困った。はたと気付いたのは市ヶ谷とお茶の水の双方に近い大妻学園(女子校)はどうかと多田先生に相談して許可を頂いた。中野は女子校のことをよく知っているなどとかかわらないで下さい。この秘密はいずれ書きますので...生きていればの話です。

大妻は短期間ならということでしたが、半地下の窓ガラスも割れている部屋へ、私1人で運び込んだ。この体力は軍隊で鍛えられたものである。この席を借りて渡辺少佐殿に厚くお礼申し上げます。しかし、こんな力仕事をしていただけでは学究らしい生活は無理、気がついたら渡辺少佐肝入の地理調査所でGHQ指令作業の80万分の1土地利用図の編集を1年契約でしていた。

しばらくして、昭和20年11月末ごろ大妻から復旧工事をするので、地図を撤去してくれと連絡があった。多田先生に相談すると、関戸さん(文部省)の住宅が借用できるというので、再び「苦力(クーリー)」になり、世田谷の関戸さん宅に運んだ。冬枯れのはじめのころのことである。

ところが関戸さんが弘前大学に転出するので、また運び出さなければならなくなった。このときには私は地理調査所の委託で土地利用図の作成に係る事務的手続きのため協力できず、復員して資源研(百人町)におられた三井(嘉都夫)先生の出番となった。かくして外邦図劇は第2幕がはじまった。

運び出した地図が明治大学の図書館とか地理研究室にないのはどうしたことだろ

うか。今でも分からない。

外邦図と私のかかわりの95%は運び屋、5%以下が調査。

注

- 1)中野尊正(1940)「狭窄セル河口」科学(岩波書店)10(6)、10頁。
- 2)「言海」の著者。1872(明治5)年文部省に出仕し、英和辞書の編集にあたり、師範学校の校長を務める一方で、イギリスのウエプスターの辞書にならい「言海」を編集していった。各語の発音、語の類別や語減・語釈・出典などを記したこの辞書は、1891(明治24)年に刊行され、広く用いられた。
- 3)[中野注]外邦図の効用の例として、神田信夫の学士院賞の正式題目は(受賞:昭和32年)「満文老档文編第一卷太祖1及び第二卷太祖2」の共同研究。彼は東大東洋史卒。小生の後輩(台北高校)。2003(平成15)年12月30日死去(享年82歳)。彼の父親は京都博物館長をつとめた神田喜一郎(台北帝大の東洋史教授)で、この人も知っています。
- 4)文化工作要員養成の為に蒙古善隣協会によって1939(昭和14)年に創設された。
- 5)「続占領下の空白、『地理調査所』物語」信濃毎日新聞連載(1995年12月23日~1996年2月14日、全30回)のうち、第5回(1995年12月29日)。ここで、中野先生は終戦直前に参謀本部で開かれた「本土作戦研究委員会」(兵要地理調査研究会)に、辻村太郎ほか地理学者とともに参加していたとされる。

3-4 兵要地誌類作成過程に関する一研究： 関東軍をとりあげて

源 昌久（淑徳大）

序

本稿は、関東軍（関係組織を含む）により作成（調製）された兵要地誌、兵要地誌調査資料および兵要地誌報告などの兵要地誌類がどのような調査要領・マニュアルを根拠にして成立しているかをトレースし、明らかにするための、基礎的資料を提供することを目的としている。これまで筆者は、若干、兵要地誌類に関する調査マニュアルについて言及してきた（源 2000:38, 源 2002:224）。今回は、調査の範囲を関東軍に限定し研究を試みた。

なお、本稿は、外邦図科研研究会（於駒沢大学，2003年11月9日）において口頭発表した内容を本誌『外邦図研究ニューズレター』の執筆要領（紙数制限）に従い、まとめた要旨である。口頭発表した後、筆者は、その内容に新たな資料を加え、訂正を施し、「関東軍の兵要地誌類作成過程に関する一考察：書誌学的研究」（「紀要論文」と以下、略す）を作成した¹⁾。

関東軍における兵要地誌類の作成組織

関東軍における兵要地誌類の作成（編纂）にかかわった組織についてのべてみたい。

『関東軍兵要地誌資料調査規程』（関東軍司令部 1936（昭和 11）年 2 月）第一総則 三に「調査八軍司令部，軍司令官隷下部隊，同特務機関並軍政部顧問部之ヲ担任ス調査

要目ニ応スル担任区分附表ノ如シ」（関東軍司令部 1936:2）と記され，附表（「兵要地誌的作戦準備ニ担任区分表」）には担任区分として「資料ノ蒐集整理」「地誌編纂」があげられている。つまり，本規程により，兵要地誌類の調査・作成に携わるシステムとして関東軍司令部，隷下部隊，特務機関，軍政部顧問部（筆者は軍政部顧問部を軍部外機関と「紀要論文」では見なしている）の 4 つのグループが存在していたことが判明した。

兵要地誌類の調査マニュアルおよび報告様式

本節の目的は，関東軍がどのような規程，調査要領（調査マニュアル）などの根拠にもとづいて兵要地誌類を調製（作成）していたのかをトレースし，解明することである。ここでのべる諸規程等は筆者の管見の範囲であり，これら以外の規則が今後，さらに明らかされることであろう。

関東軍司令部『昭和十三年度 関東軍兵要地誌調査計画』（昭和 13（1938）年 2 月 22 日），関東軍参謀部『関東軍兵要地誌調査参考書』（昭和 11（1936）年 6 月 1 日）およびでもとりあげた『関東軍兵要地誌資料調査規程』（関東軍司令部 1936（昭和 11）年 2 月）の 3 資料を見出した。

関東軍参謀部作成の兵要地誌資料目録（月報）の検討

表1 関東軍参謀部作成の兵要地誌資料目録(月報)のデータに関する集計表

No.	対象地域	部隊作成点数	特務機関 作成点数	満鉄(関連機関) 作成点数 ()注1	その他の機関 作成点数	合計点数
1	ソ領・外蒙古	50	66	5 (3)	12	133
2	満州	35	0	20 (20)	82	137
3	ソ領・外蒙古	49	85	16 (9)	39	189
4	満州	26	0	23 (22)	53	102
5	ソ領・外蒙古	61	91	7 (3)	9	168
6	満州	24	0	13 (13)	50	87
7	ソ領・外蒙古	37	59	4 (2)	6	106
8	満州	41	0	16 (14)	72	129
9	ソ領・外蒙古	25	91	0 (0)	9	125
10	満州	31	0	19 (17)	59	109
11	ソ領・外蒙古	29	85	1 (0)	2	117
12	満州	32	0	20 (20)	49	101
13	ソ領・外蒙古					
14	満州					
15(1)	満州	56	0	22 (22)	78	156
15(2)	ソ領・外蒙古	17	89	11 (6)	23	140
	(総計)	513	566	177 (151)	543	1799
	(比率)	28.5% 注2	31.5%	9.8%	30.2%	100%

注1：上記点数の内、(軍用)資源を主題としている資料数。

注2：総計1799点中の比率。%値は小数点第2位を四捨五入
(2003年12月作成・改訂版)

(1) 兵要地誌資料目録のリスト

関東軍参謀部が作成した兵要地誌資料目録(月報)15点(内、2点は標題紙のみ)を時系列に配列し、リスト化を試みた(文献リストは「紀要論文」に収録してある)。

(2) 兵要地誌資料目録(月報)のリストの分析

前述(1)で作成したリスト中のデータの

集計結果を表1 関東軍参謀部作成の兵要地誌資料目録(月報)のデータに関する集計表に示す。

本表および(1)に記載した兵要地誌資料目録(月報)のリストを検討すると、つぎのようなことが推定される。

1. ソ領・外蒙古を対象地域としている兵要地誌資料目録月報一点当りの採録対象資料点数の平均は、約140点(小数

点第 1 位を四捨五入)である。満洲を対象地域としている兵要地誌資料目録月報一点当りの採録対象資料点数の平均は、約 111 点(小数点第 1 位を四捨五入)である。

2. 満洲を対象地域としている兵要地誌資料類では特務機関が作成したものが見当たらない。
3. 満鉄および満鉄関連機関が作成した兵要地誌資料類の総計 177 点中、151 点の主題は(軍用)資源に関するものである。
4. 刊行された兵要地誌資料類の作成者は、特務機関が 31.5%、関東軍隷下の部隊が 28.5%、満鉄および満鉄関連機関が 9.8%であり、三者で作成者数全体の約 7 割を占めている。

隷下部隊作成の兵要地誌類の検討

本節では結語にかえて、兵要地誌類の記述方式がで紹介したマニュアル類といかに関連しているかを検討した。でとりあげた兵要地誌資料目録(月報)(二次資料)中に採録されている資料総計 1,799 点のうち、8 点の原資料(一次資料)を見出した(2003 年 11 月現在)。リスト中の No.8 の三。満洲西部に記載されている 2 点。No.15-1 の一の 1.東部に記載されている 6 点。計 8 点である。作成者(調製者)は全て隷下部隊である。以下の 2 点について検討を加えた。

1. 『乾燥期二於ケル特別調査 林東街 - 西烏珠^マ穆^マ泌王府間 林東街 - 崑都街 - 魯北間 兵要地誌調査報告』(満洲西部察哈何爾省境地方兵要地誌資料)

2. 『凍結期二於ケル補備調査 東安 永安間迂回路調査資料』(満洲東北部兵要地誌資料)

注

- 1)「紀要論文」は『淑徳大学社会学研究紀要』第 38 号(2004 年 3 月発行)に掲載(予定)である。

文献

防衛研究所図書館の請求記号を付す際、「C.N.」と以下、略す。なお、アジア歴史資料センター(「JACAR」と以下、略す)のデータ・ベースを利用した資(史)料はレファレンス・コードを記載した。本稿は、JACAR の画像からなる資料を同定識別する際、画像番号ではなく後日、資料に捺印されたノンブルを採用し、「(ノンブル)」と記述した。

関東軍参謀部 1936. 『関東軍兵要地誌調査参考書』(C.N. 陸軍省 陸満密大日記 S11-8) < JACAR (Rec.C20010031672) ノンブル 0506-0610 >

関東軍参謀部 1938. 『乾燥期二於ケル特別調査 林東街 - 西烏珠穆泌王府間 林東街 - 崑都街 - 魯北間 兵要地誌調査報告』(満洲西部察哈何爾省境地方兵要地誌資料) < JACAR (Rec.C20010034262) ノンブル 1405-1519 > (『陸満密大日記』に所収)

関東軍司令部 1936. 『関東軍兵要地誌資料調査規程』(C.N. 陸軍省 陸満密大日記 S11-4) < JACAR (Rec.C20010031131) ノンブル 0652-0661 >

関東軍司令部 1938. 『昭和十三年度 関東

軍兵要地誌調査計画書』 < JACAR
(Rec.C20010027230) ノンブル 1254-1361
>)(『陸満機密大日記』に所収)

関東軍司令部 1940. 『凍結期ニ於ケル補備
調査 東安 永安間迂回路調査資料』(満
洲東北部兵要地誌資料) < JACAR
(Rec.C20010035839) ノンブル 0552-0565
>)(『陸満密大日記』に所収)

源 昌久 2000. わが国の兵要地誌に関する
一研究：書誌学的研究. 空間・社会・地理
思想 5:37-61.

源 昌久 2002. 石井(七三一)部隊と兵要
地誌に関する一考察：書誌学的研究. 淑徳
大学社会学部研究紀要. 36:209-226.

3-5 第二次世界大戦中の機密図誌（海図・航空図）(1)

坂戸直輝（元海上保安庁水路部）

[編集者のまえがき]

以下は坂戸直輝氏の第4回研究会における発表の記録である。2003年11月9日の発表のあと、坂戸氏にはこのニューズレターに掲載する原稿の執筆をお願いしていた。しかし同氏は、以後怪我のため玉川病院に入院され、執筆が困難になった。このため急きょ講演記録のかたちで原稿を準備することにし、録音テープを学生アルバイトによって書き起こし、これを今井健三氏（日本水路協会）に訂正していただいた。これをもとに小林がさらに見出しなどをくわえ、さらに坂戸氏・今井氏にご覧いただき、掲載することとした。なお、坂戸氏は玉川病院退院後は自宅で療養されているところである。

発表に際して坂戸氏は、A4版全3枚の要旨にくわえ、A4版2枚の『日本水路史』海上保安庁水路部、1971年、224-227、300頁）からの抜粋、A3版1枚の水路部の地図、さらにA3版14枚+A4版1枚の『普通水路図誌目録』・『急速覆版海図目録』・『秘密水路図誌目録』・『秘密航空図誌目録』からの抜粋からなる資料を配付されたほか、各種の海図・航空図の実物も今井健三氏・上林孝史氏（海上保安庁海洋情報部）の協力を得てご持参くださった。

またこの発表では、当初の予定の内容の半分をカバーしているにすぎず、再度

坂戸氏のご発表を期待している。

はじめに

私、先ほどご紹介に預かりました坂戸直輝です。戦前から戦中戦後、水路部にずっとおりまして、文官だったために海上保安庁に水路部が移行して以後も勤務をつづけ、定年（1977年）までおりました。最後の7年間は、海上保安学校（舞鶴）の水路教官室、室長を3年やって、それから第九管区（新潟）の水路部長を4年やりまして退官しました。それから（財）日本水路協会に7年おりまして、現在の会社（国土地図株式会社）では、やはり海の方の仕事をずっとやっておりました。

いろいろ、その間に見聞きしていること、あるいは私が勉強したことを体験的にお話したほうがいいと思っております。今までそういう話を私は何回か講演したことがあります¹⁾が、秘密図誌の話をするのは初めてです。いろんな資料がありますので、まず資料の確認から行います。

水路部の位置

最初のほうは、私が説明する要旨（A4版全3枚）ですが、つぎの大きい図面（図1）が水路部を示す地図です。こういう形

のときに戦災を受けたわけです。北にみえる千代橋は今の魚河岸(中央卸売市場)の通りでこのままです。築地病院と書いてあるのは、現在は国立がんセンターです。河川と書いてあるのは、高速道路になっています。

ここで大事なのは、この右下のところに経緯度基点標とあることです。これは魚河岸の正面入口のロータリーのところにあたります。道路交差点の中央にあったんです。それで、今は朝日新聞社の敷地になっていますが、そこにこの経緯度基点標という銘板がありました。つまり地理的位置に間違いなくあったわけです。

最初に海軍の観象台から天文台に移って、それから経緯度は東京天文台の測定値を用いていましたが、大正4年~6年水路部天測室で精測をおこない、従前の経度に10秒余の誤差があることを発見しました。その天測室の元の位置がここだということです。それがなんらかの拍子で壊されちゃったんです。この経緯度基点の銘板だけでも今の朝日新聞社のところにあればいいのだけでも、現在は水路部の中の業務資料館にあります。これは是非今日来ておられる方だけでも知っていただかなければと思って、この図をつかって説明いたしました。

図誌目録

その次が図誌目録です。まずはじめは、『普通水路圖誌目録』(水路部、昭和19年5月刊)の表紙と中表紙のコピーです。その次に、どういう区域の図をインデックスではどう配列しているかという、索

引図の一覧表があります。

この図誌目録はちょっと面白い。終戦直前に作ったもので、合冊になってるんです。それで、普通の人だと分からないんですけど、一冊の中に「急速覆版海圖目録」(急速覆版海圖については後述)という目録があるんです。その目録が大事なんですが、世界中の海図を出してるわけです。急速覆版海圖というのは全部写真版です。だいたい1,960版ぐらいあります。ここにどういう区域の海図を出していたかということが書いてあります。その次にその区域はどうだったか。索引圖第1をご覧になると、遠くアメリカの方まで出していたということが、お分かりになっていただけるんじゃないかと思えます。

秘密水路圖誌目録

さらに次の資料が大事です。特別に持って来たもので、実物です。『秘密水路圖誌目録』(水路部、昭和19年5月刊)といます。要旨にどういう分類になっているか詳しく書いてきました。その全部をコピーする訳にいかないの、「軍機海圖、軍極秘海圖及秘海圖番号索引」という部分、つまりどのような海域の図が出ているかという目次と索引図の一覧表をコピーしました。どういうところの海図が出ているかお分かりになると思います。

それから、その目次に対する索引図のコピーをとりました。索引図は、ご面倒でも右左を貼っていただくと、全貌が分かると思います。これは日本からずいぶん遠いところまで出していたことがお分

かりになると思います。この種の海図は
だいたい 500 版出ていました。あとでそ
の話をしていただきます。

秘密航空圖誌目録

それから航空図です。秘密の航空図は
たくさん出していました。これこそ海軍
の航空隊のためにはなくてはならない図
です。この目録には、目次があるんです
けど、どういう地域の航空図があるか
ということを書いていません。そのため、
索引図の目次がなく、「機密航空圖索引
圖」という、索引図そのものをここに持
ってきました。配付資料にコピーがある
「機密航空圖索引圖第 1」というのは、
日本の割合に近くを示していますが、こ
れからはるか遠くの地域までの航空図が
あります。

秘密の海図、航空図のサンプル

次の機会には、どのようにこれらの図
を編集したか、詳しいことをご説明する
として、今日は航空図というのはどうい
うものか、秘密の海図というのはどうい
うものかという、サンプルを持ってきま
した。いずれにしても図の周囲に赤い帯
が入っているから普通の海図との区別が
わかるということと、番号が一枚一枚ナン
バリングしてあり、それをもとにどの
図がどの配布先にいつてるか、というこ
とが記録できるようになっています。

図と図誌

それから一番はじめにお断りしなけ
ればならなかったのですが、昭和 19 年当
時の水路図誌、航空図誌の話に関連して、
用語の解説をしておきたいと存じます。

「図誌」というのは、さきほど兵要地誌
のお話を源先生がされたように、海図と
の関係で大きな意義をもつ水路誌なの
ですね。図と誌は表裏一体で、セーフティ
ナビゲーションというか安全な航海のた
めには、水路誌にはなくてはならない内
容の説明が書いてあるわけです。日本は
もちろん、外国地域なんかものすごく詳
しい水路誌がずーっと出てるんですね。

水路誌はだいたい 60 冊ぐらいあるの
ですが、その辺がどういう風になってい
るかということ参考に後から申し上げます。
それからもう一つは、海図、水路
誌の宿命として、生まれたら必ず現状を
反映しつづけねばならない。海図は昔か
ら x 、 y 、 z と時間の 4 次元の仕事を、4
次元でいくというような生命を持ってい
ます。ですから測量するときも、いつの
測量、いつの水深というのをみんな記録
しておきます。あとで水深はその時の潮
汐の潮位記録から換算して決めます。

海図ができたあとは、水路通報という
もので水路の現状を通報するということ
を非常に詳しくやっています。一週間に
一回、水路通報を出します。あとでまた
詳しくご説明しますが、敗戦処理の
ところに GHQ の命令で水路通報を 200 冊
提出するようにということが出てきます。
海図と水路誌と水路通報の三つで、水路
に関する情報を利用者に伝えます。これ
は今の電子海図になっても変わらないん
じゃないかと思います。

水路部の名称

資料の説明は以上でおわり、本題に入ります。まず水路部の名称の変遷というのは、要旨の2枚目に書いてあります。水路部はずっと水路部という名称できていたのですが、水路寮という名称の時代もありました。海軍水路部というのも2年ばかり使ったことがあります。結局、いわゆる艦船だけの、軍隊だけの海図を作っているんじゃないということで、海軍という言葉を取って、ずーっと終戦まで水路部という名前でした。終戦後海上保安庁に入ったことがあって、それで水路局、それから水路部になりました。でも、残念なことに平成14年に海上保安庁海洋情報部と改称されました。こういう普通名詞的なことがいいのかどうかわかりませんが、私自身は長くいたので固有名詞の水路部が懐かしいと思います。ここでは古い話をするので水路部ということになります。

水路部の組織

それから、要旨2番目の水路部の部制組織というところにうつります。これは、戦争突入で相当大きくなった時代の組織のことを書いてあります。当時、第一課、第二課という名称を用いており、参謀本部の陸地測量部も第一課、第二課というようなことで、名前だけでは業務内容がわからないので、ここに書いておきます。第一部第一課では、海図や航空図の編集を全部やっていたわけですから、

じ第一部の第二課で製版印刷をやっていました。第二部（第三課～第五課）は観測の方です。それから、第三部の第六課・第七課はあとで海軍気象部に移行します。それが水路部の中であって、随分人数が多かったのです。しかし終戦の直前には海軍気象部ができ、ちょっと人数が少なくなりました。

それからもうひとつ戦時下の部制組織としては、上海海軍航路部が昭和15年12月にできました。これは揚子江の測量をやるためです。中華民国の海道測量局というのはなかなかいいチャートを作っており、その成果は素晴らしいものでした。国際交換でどんどん来るわけです。みんな漢文で書いてあります。地名等縦書きで、向こうのちゃんとした写植式の活字で素晴らしいものでした。それがいつの間にかなくなってしまった。つまり終戦のどさくさの処理です。外国の大事な資料として、存置しておけば良かったと思います。日本の管轄の上海海軍航路部になったら中華民国で作ったそういう海図は見られなくなりました。当時の旧版の何枚か写真版が水路部にあると思います。揚子江の近所の部分です。今はそういうのを見るよりしかたがありません。

それから、もうひとつ南方海軍航路部というのがスラバヤにあり、昭和18年に測量部隊が行きました。ここでは海図も作っていたし、測量・水路探索、さらに海象観測もやっていたけれども、戦争が危なくなって昭和20年の1月、撤退しました。上海海軍航路部の方は、昭和15年12月にできて、そこで終戦を迎えたわけですから、

水路図誌の細目

要旨の次のページでは水路図誌、航空図誌の細目にふれています。これは、昭和10年に、海軍大臣名で決めたものです。水路図誌には大きく分けると、まず秘密水路圖誌があります。それから普通水路圖誌です。秘密水路圖誌にでているものは秘密で、その細目はどれを見ても「機密」という言葉がついています。

秘密水路圖誌のなかに、小分類としてまず(イ)機密海圖と(ロ)機密水路書誌があります。ついで(ハ)機密二属ス假製ノ水路関係圖誌、さらに(ニ)機密告示となります。告示というのは、通報のことです。

それから普通に出版されていた海図に関連する普通水路圖誌となります。(イ)普通海圖、(ロ)普通水路書誌、(ハ)機密二属セザル假製ノ水路関係圖誌とありますが、ここでひとつ取り上げたいのは(ニ)雑用海圖です。これはもう、みなさん年輩の方には懐かしい思い出ではないかと思うのですけれど、雑用海図は同じ区域について同じ原版から薄紙に印刷したもので、安く買え、港湾修築用、調査研究用に非常に便利でした。雑用海図は、終戦後もまだ出しているなと思ったんですが、昭和57年にどういいうわけか廃止になりました。

雑用海圖の次は(ホ)水路二関スル普通告知報告用紙類です。これは、船舶がいったん航海すると、どのような状況で航海したかということを必ず水路部にレポートしてくるんです。出航すると

き、その用紙をみんな持って行ってもらうわけですね。漁船でもどんな小さな船でもどんな大きな船でも、もちろん艦隊でもみんな持っていくわけです。それでどういうところを航海して、どういう風にしてきたかっていうような情報とか、あそこの目標はどうも、この海図じゃまずいからこういう風に変えてもらわないと困るとか、顕著な目標の書き方がまずいというような、いろいろなことを書く航海報告の用紙です。

航空図誌の細目

つぎの航空図誌は、水路図誌と全く同じような分類になっています。秘密航空圖誌の中に、(イ)機密航空圖、(ロ)機密航空書誌、(ハ)機密二属ス假製ノ航空関係圖誌、とみんな同じような名称です。報告用紙([二]航空路二関スル機密告示類)も同じです。普通航空圖誌も普通水路圖誌に対応しています。

海図の区域

それからもうひとつ説明しておきたいのは、海図の区域です。海図はそうとう昔から刊行区域というのが決まっているわけです。どういう区域を対象に出すかということは、『普通水路圖誌目録』索引圖第1を見ていただくとよくわかる。ここでは第1区(東経90度~170度、赤道~北緯65度の範囲および東経170度~175度、北緯4度~20度の範囲)、第2区(東経30度~西経70度、南緯60度~北緯70度の範囲、ただし第1区およびアメ

リカ東岸・地中海以北をのぞく、第3区（第1区、第2区以外の区域）と分けて、各区ではどのくらいの縮尺まで示すとか、メートル式にするとか、やかましい規定がありまして、そういう区域ごとに海図を出してたわけです。先ほどのこの索引図第1を見ていただくと、世界中について出していたことがわかります。

秘密海図と秘密航空図

つぎに秘密海図と秘密航空図についてお話しします。『秘密水路圖誌目録』の目次の「機密海圖」の下に、「軍機海圖、軍極秘海圖及秘海圖番号索引」と書かれています。この場合、「軍機海圖」というのが一番ウエートが重く、「軍極秘海圖」というのがその次、「秘海圖」というのは取り扱いが割合に楽でした。軍機と軍極秘には海図番号のあとに小番号がついていて、どこになにが、例えば戦艦大和には何号の何番がいつているか、水路部には何号の何番がいつているか、わかるようになっていて、取り扱いが非常にやかましかったです。「秘海圖」ではそういうことはありませんでした。

航空図については、『秘密航空圖誌目録』の目次では細かく分かれておりますけれども、実際は「秘」しかなく、水路部の長い歴史で、秘密航空圖はこの3番目の「秘航空圖」しかありませんでした。あと、軍極秘の何々、軍機の何々というのは航空雑圖にもあります。先ほどちょっとお話が出ました兵要や航空気象のがそういうものに含まれていました。

秘密海図の刊行区域

『秘密水路圖誌目録』の索引図第1を見ますと、秘密海図の刊行区域がわかります。これで500版もある。日本領はもちろんですけども、ずっと南方の方から始まって、ニューギニアの方、それからアンダマン群島、モルディブ（図ではマルダイブ）群島、東の方はギルバート諸島、ハワイ諸島、択捉島なんかもありません。

国際水路局脱退と急速覆版海圖

つぎに国際水路局からの脱退の話をしてします。水路部は、同局創立当初の1921年から国際水路局に入っていたわけです。日本が国際連盟を脱退してからも、つづけて加盟していたのですが、とうとうやむを得ずに昭和15年に撤退したというか、脱退したわけです。

さきに中国の海図に関連してお話したように、加盟している頃は、各国の海図は無償でどんどん交換しなくてはならなかったんです。しかし脱退によって、そういう交換がとまり、全部の国から海図がこなくなりました。漁船だとか大きな船舶とかは、海外に買ってやることもできるかも知れないが、それも買えなくなった。もうシャットアウトされたわけです。そうすると手に入るのは、水路部にある現品というか、今まで持っているもの、確保していたもの、あとは各国公館に当時は海軍の武官がいつていましたから、そういうところからきた海図を、急速覆版しなければならなかった。世界中

のこうした海図を出さないと、航海できなくなったら大変だということで作ったのが急速覆版海圖です。これには1万台の番号が入っています。

これは表題だけ和文にしたものを貼って、あともう全部原版のままです。もし水深がはいるものなら、どんどん加えるし、もう水路部だけでは印刷できなくなって、民間の凸版印刷・大日本印刷・共同印刷でも印刷しました。こうした印刷所を示す記号が外図郭線内の右下隅に印刷してある。それがないのは、水路部の直営です。こういう海図が相当量あります。その目録はB4判で、217ページもあり、膨大な量です。まあだいたいこんなことで図誌の刊行は終戦を迎えたわけです。

水路部の製図と印刷

さて終戦を迎えるとき、あるいはそれまでに私がいろいろ経験したことをこれからお話していきます。水路部というのは昭和8年に建てられた割にモダンな建物で、最初から機密の海図を作る場所をちゃんと作ってありました。図1の庁舎及製図工場の一番左の方にある軍機室で軍機の手帳を作っていました。私も入って、こういうところがあるのかな、と思いました。部屋の中にまた部屋があり、中側はそこだけ格子で囲まれていました。

そこからずうっと抜けていくと、印刷工場があります。製版印刷というのをやってから流れ作業でいちばん終わりの印刷場にやってきて、輪転機がたくさんありました。

ここの印刷場は格子があって、印刷しているところのほか、事務をやる部屋、それから刷ったものを持ち出すときにきちんと数えなければならない、そういうことをやるような部屋が外から見えました。

それから毎週毎週水路通報というのがでて、そういうものを切って貼らなきゃならない。通報や補正図などです。機密図誌は、その取り扱いが非常にやかましくて、甲板士官というのがおりまして、そこに持っていくのは任官した人じゃないといけない。焼却場で廃棄した紙を燃やす場合も、燃え尽きるまでそばにいるわけです。そういうことを、ずいぶん神経を使ってやらなきゃならない。そういう点は、陸地測量部も同じでしょうけど、やかましかったです。

印刷場には何回も仕事で行きました。あるとき、鉛をいれて赤表紙を作っている製本工の女の人を見ました。水路図とか水路誌じゃなくて、軍令部の兵要関係の暗号電報用の乱数表だろうと思います。海軍がそういう秘密の印刷物を作るのには、水路部以外にないからです。そういうのを私、目の当たりに何回も見ました。私は所属の第一課で、印刷は第二課ですけども、ここに入るのはなかなかやかましかったです。よく行きましたが、なにか異様な感じがしました。

時を経て、『戦艦大和の最期』という吉田満の小説(吉田, 1952)を読んだら、やっぱりそうだったなと思いました。戦艦大和や武蔵のような大きい軍艦になると艦橋は上下二階になっているんですね。上がやられたら下を使うわけです。吉田

満は、副電測士の少尉で、東京帝大出で、学徒で入ったらしいのですが、主要な地位にいたので、海図のこともずいぶん詳しく書いてあります。出撃の部分では、海図について手に取るように書いてあるのです。今お話ししたのは、この小説の「最終処置」という小章題のところで、ちょっと読みます。

暗号士ヨリ暗号書ノ処置終了ヲ伝声管ニテ届ク 自ラノ腕ニ軍機書類一切ヲ抱キ、艦橋暗号室ニ入りテ内ヨリコレヲ閉ゼセリ、ト
敵ノ入手防止ニハ完璧ヲ期セル暗号書 鉛板ヲ表紙ニ打ッテ沈降ニ万全ヲ期シ、更ニ潮水ニアエバトケ去ル特殊「インク」ヲ以テ印刷シ、且活字ノ跡ヲ消ス為文字ト異ル紙型ヲ二重ニ強ク刻印セリ シカモ暗号士、身ヲ以テ機密ヲ保持セザルベカラズ

私の周りに毎日毎日そういうことをやっていた人がたくさんいた。文字を裏側にしてやっていたのはそれだな、という風に思いました。

水路部の空襲

昭和20年3月10日の空襲で、水路部は大きな被害を受けました。昨日の渡辺正さん（当時参謀本部）の話じゃないけど、水路部でも当時は交通機関が不通になっても出勤せよというので、私も何回か歩いて通いました。3月10日の時には、たしか歩かないで済み、交通機関が動いていたと思います。方々がひどい状態になっているので、どうかと思って行きました。水路部は本庁舎が焼けてません

から、ああいいな、と思って入って行ったら、製版印刷の方がどうもただごとじゃないんですね。焼夷弾で全部やられて。

ただし測量原図とか経緯度成果表とか大事なものが全部入っていた、後ろの方の原版庫には焼夷弾が落ちませんでした。これで測量原図が助かったのは、あとの水路業務遂行のためにどのくらい役に立ったかわかりません。

当時の記録としては、原版庫が無事で、測量原図がOK、しかし図誌の倉庫が焼けました。図誌倉庫というのは、物品検査場および倉庫です。ここに全部刷り上がった海図が入っていたわけです。ここが、3月10日に撃ち抜かれたから、海図が焼ける、航空図が焼ける、水路誌が焼ける、大変だったわけです。それを、毎日毎日整理するのですが、風で魚河岸の方から銀座通りの方にどんどん飛んでくわけです。魚河岸の方から。軍人は飛ばさないようにしろっていうけど、飛ばさないようにすることができません。これは、あ～と思って空を仰ぐよりしかたがない。そういうような毎日でした。今でも思い出します。機密の図類が全部やけ飛びまして、非常に大変だったわけです。

終戦と水路部の移管

昭和20年3月10日の空襲の後は、焼けあと処理やなんかをやっていて、まあそれでもってとうとう終戦になったわけです。私はこの終戦の時にちょうど、水路部修技所特修科²⁾にいて練馬の方に疎開していました。水路部は方々に疎開してまして、修技所は練馬の開進第一国民

学校校舎に全部疎開してたわけです。そこに通っていました。学生が5人いて、それらが移管の手伝いをやったわけです。直接私は見てませんが、『日本水路史』(海上保安庁水路部編, 1971)の224~227頁の終戦に関する記述資料の中に、どういふことから移管になったというようなこと、それから終戦になってどういふものを提出しなければならなかったということが書いてあります。

まず昨日の陸地測量部から地理調査所への移管のお話のように、水路部が残ったというのは、『日本水路史』に書いてありますように、沿岸海上交通の不安を一掃するための水路測量の必要性というのが第一の理由です。『日本水路史』の300頁掲載の「連合軍最高司令部(GHQ)一般命令第1号」(昭和20年9月2日)の(口)に「航海ヲ便タラシメル一切ノ施設ハ直ニコレヲ復活ス」とあります。これを受けて水路部はずっと仕事を続けていけということで、素直に残ることができたわけです。これにくわえて、昭和20年12月26日付のGHQからの覚書には「水路部は下記制限内において平時の一般業務を遂行する」とあり、そのあとに「今後すべての水路部刊行物は制約を受けない」とあって、どんなものも出してもいいということになったわけです。

この覚え書きには、さらに「他国調製に属する秘密海図を覆版しない」とあるほか「日本海図にアメリカ海軍水路部制定の図式を採用し、おもな表題および水路記事に英訳を付ける」とあって、アメリカの図式を使うようにしました。しかし、アメリカの図式については、翌年4

月17日の覚え書きで取り下げられたので助かったわけです。

なお9月2日の覚書には、さらに「なお水深は従来どおりメートルで表示して差し支えない」とあります。アメリカでは今でも海図はメートル式ではない。世界の全部の国でメートル式になってないわけです。国際水路局に入って、そのリコメンデーションによりながら、メートル式になっていない国があり、そのなかには大国もあるんです。英国がやっとやっとそうなったくらいで、アメリカはまだなっていない。そろそろなるころだと思います。

9月2日の覚書には、その次に「日本水域における必要な測量は当司令部の許可を要す」とGHQの許可がいるとしている。これは占領当時当たり前ですね。さらにそのつぎに、「日本水路部が毎週発行する水路告示は、その都度英文版200部を連合軍最高司令官あてに提出を要す」とあります。これは水路通報です。すでにお話ししましたように、海図と水路誌と水路通報というのは切っても切れないもので、水路通報がないと、向こうでも困るからでしょうね。そういうようなことから、向こうからいろいろ監督する軍人が来るようになったわけです。

国有財産資料の引き渡し

終戦の処理の中で、国有財産資料のアメリカ軍への引き渡しについては、『日本水路史』の224頁に記載があります。当時はどこの役所もそうですけど、武官の軍人と文官の高等官が一緒になって分担

して任務についていたわけです。それで幹部がメインになって、9月4日から11月8日までかかって出したわけですね。図面として提出したのは普通海図はもちろん、秘密の軍機・軍極秘・秘の海図全部。秘の航空図、その他の秘の機密航空図、そういったもの全部。それから秘の水路誌、秘の航空通報、秘の水路通報。

あとは原図の方です。測量原図を全部提出しなきゃならなくなっただけでも、日本側でもこれからの仕事があり、戦後の日本領の区域は原図がないと困るから、持っていこうとはしませんでした。そのかわり、そのものと同じものを2枚、できあがりきれいにしろというような注文で、当時は、まだゼロックスもありませんで、毎日青焼きをつくって水洗いしたのを輪郭で切って乾かしたりしてるのを目の当たりに見たのを覚えています。

提出しなければいけなかった測量原図は、日本領でなくなったところですね、千島、樺太、奄美大島、小笠原、それから沖縄の大半。そういう測量原図は、経緯度成果表とともに、全部の英文のリストを作って提出しました。その後、奄美大島とか小笠原、それから沖縄の返還のときには、測量原図は一括関係書類と一緒にきちんとしてひとつも痛まないでちゃんと返してくれました。これはまあ大したもんだと思いました。

アメリカ海軍水路部への留学

時を経まして1961年頃、私は1年間アメリカの海軍水路部に留学しました。そのとき、全部で10人、外国人が教育を

受けました。最初の頃に見学があり、チャートライブラリーという海図の図書館に行きました。素晴らしい部屋で、もてる国はこんなにスペースもあるのだなと思ってびっくりしたわけです。そこに日本で接收された軍機図がありました。南洋群島とか、日本のも全部あるのです。全部出てきました。日本のように、地図ケースにうんと詰めてないから、楽々出てきて、日本でももう少し何とかならないのかなと思いましたね。地図に対する考え方が、日本は本当にお粗末でしたね。

アメリカ海軍の水路部は、今は国防省画像地図庁というかたちで陸の地図と一緒になっていますけども、それでも同じように、きちんとなっていると思います。おそらく陸の地図の方もきちんとなっていると思いますね。

アメリカでは、図面に対する愛着というか、丁寧さがあって、日本の海図は良く出来ているとインストラクターが説明したときには、私もまだ、英語がなれないのに、その日ばかりはちょっといい思いをしました。他の国は東南アジア系の人が多いから、自分の国で出しているのは英国版海図が多いんですね、インドとかパキスタンとかそういうところからきていました。そういう国は、おそらく英国の海図でしょうね。当時としては何千版という日本の海図が向こうに行ってたんです。

部屋なんかも蛍光灯で、ちゃんと一人か二人いましてね、鍵を開けて入ったときに人がいるんじゃない、いいコンディションで保存されているんです。

拿捕海図の調査

それからもうひとつ、昭和 17 年に神戸に出張に行ってくれということで、大友という海軍大尉と、村井という技手と、それからいちばん若い私が下っ端で、3 人で行きました。はじめは何しに行くのかさっぱりわからなかったのですが、山下汽船がシンガポールで海図を拿捕してきて、その調査を全部やってくれということです。使えるものあるかどうか、掘り出し物があるかどうか、それを水路部の目録と対照して全部検査するわけです。山下汽船の人から連絡があって、英国の海図だということがわかったから、英国関連の目録を持っていきました。

倉庫に入っていったらすごい夏の暑さで、何日もこんなところでやるのかと思いました。一枚一枚海図を目録で当てるのですよ。いくつか掘り出し物があり、その中で一番は、英国の秘密海図のインデックスで、これは赤色です。(参加者からの「鉛は入っていなかったのですか?」という質問に対し)鉛は入っていませんでした。英国の海図は、すこしハードカバーでしたけどね。

その仕事がお開きになって、姫路に私の親戚がいたので、寄ってちょっと羽のばして帰ろうと思ったのです。ところが坂戸、これを持っていけっというんですね。これは命より大事な大変なものだと大友という大尉がいうんですね。そんな思い出があります。そういう拿捕したものが、何図か覆版海図になっているわけです。

今後の研究にむけて

そろそろ終わりにしますが、外邦図と海図・航空図の関係について私の思っていることを話させていただきます。普通海圖と急速覆版海圖、これは外邦図をお調べになるときに是非使っていただいたらいいと思いますね。昨日ちょっと東北大学の渡辺さんから、東北大学の外邦図目録(東北大学大学院理学研究科地理学教室, 2003)を見せていただきました。素晴らしいインデックスで、日本のだけではなくて外国の地図・海図も大学のような機関でやっていっていただかないと、だんだん捨てられていくようになるんじゃないかと思います。急速覆版海圖だっけいつかは処分されるでしょう。

急速覆版海圖はありとあらゆるところの海図を出していますからね。しかも写真覆版で、調査をするときに非常にいいですね、書き直しているのじゃないですから。英国海図が主で、フランスのを覆版したのもあります。『急速覆版海圖目録』を見ると、どこの国の海図を覆版したかってちゃんと書いてあります。沿岸航海用海図にも沿岸目標や地名やなんか書いてあるんですね。インドの英国海図で素晴らしいのがありますから、一度見ていただければと思います。

あとは秘密の海図ですね、今日お配りしましたので、どういうところについて出ているのかはお分かりになったと思います。それから秘密の雑圖と書いてあるところに、海象気象圖というのがありません。これは見逃しがちですが、たくさんあります。外邦図の資料として海図も系

統的に使っていただくことが大事だと思います。

あと、航空図は意外と役に立つかもしれません。向こうに展示しているのは海南島の航空図です。航空図は外邦図の兵要地誌関係を調べる資料になるのではないかと思うのです。どうしてかといいますと、航空図にあらわれる陸部の資料は水路部にはありませんから。当時の参謀本部の陸地測量部から取り寄せるとか、海軍の駐在武官から何とかして資料を手に入れて、しかも色刷で作ったということは素晴らしい内容です。

航空図は、地図の投影の話になりますが、基準緯度を最初に計算しなければならないのです。全部メルカトル図法ですから。日本の付近は緯度 35 度で当たり前なのですけれど、航空図は世界中緯度 35 度でやっているんです。図の接合が自在で飛んでいけるぞという、大きな漸長図法というか、メルカトル図法を想定していました。

それからもうひとつ、航空図では地名が全部カタカナです。なんでそうなったかということ、海図は、ほとんどが昔の商船学校を出た人やあるいは兵学校を出た人が使いますから、英語で大丈夫です。航空図の場合は、軍用機に一人で乗ることもある。また地名が横文字で読みにくいということで、最初から全部カタカナです。そのカタカナの地名調査がなかなか大変で、膨大な仕事量でした。

海軍航空図の製作には地名の係員が 20 名ばかりいましたけど、そういう人たちだけでは足りないのです。当時の文理大の地理科の学生が 20 名、東京の女子大の

英文科の学生が 80 名、やはり戦争ということで動員できたんでしょうね。それで、東大の辻村(太郎)さんとか長谷部さん、外国語学校の朝倉さん、文理大の田中(啓爾)さん、内田(寛一)といった教授が水路部の囑託となって、カタカナの地名をちゃんとルールを作って決めた。1 地名 1 カードで作業した。大変な仕事でしたので、地名調査のことは忘れないでいてもらいたいです。

秘密水路誌

水路部の資料として、これ以外に、海図に対応する赤表紙の秘密水路誌があります。水路誌は 1 巻から 4 巻、日本中と外国地域が相当詳しく出ているわけです。第 1 巻が本州、南方諸島、内海、北海道、樺太南部、第 2 巻が九州、南西諸島、台湾、朝鮮、黄海北濱、第 3 巻が南洋群島、マリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島。南洋群島は日本の生命線でした。第 4 巻は、シベリア沿岸、満州国沿岸、支那沿岸、東沙島沿岸です。

先ほどお話しした測量原図の提出の時には、南洋群島の測量原図は全部提出しました。南洋群島は日本領だったわけですから、大変な量の測量原図がありました。日本本土から三角測量が届きませんので、あそこだけのちゃんとした三角測量がありました。

海陸兵要圖

最後に、海陸兵要圖があります。水路部は、今の建物に建て替えるときに、第

二大蔵ビルという、有楽町の方に一回引っ越したんです。引っ越しするときに既にもう、海陸兵要圖関係資料が処分されました。それから向こうから帰ってくる時にもまた処分されてしまいました。本当はできあがってから全部ゆっくり処分すればいいのに。

国土地理院が移転するときには、五条さんという方を知っていたので、「五条さん、不要な図は移転後に処分すればいいんですよ」と言いました。だから地理院ではちゃんとなっていると思います。そういうことで、水路部には海陸兵要圖もあったんですよ。

海陸兵要圖というのは、水路部軍極秘・水路部軍機、軍令部軍極秘・軍令部軍機、軍令部秘というのが肩書きのチャートなんです。保存しておかなきゃいけなかったんですね。おそらくアメリカには接收されたのではないかと思います。それがわかっていけば、私、1961～62年に行ったときに、見せてくれと言ったら、おそらく見せてくれたと思います。海陸兵要圖は、水路部よりも地理院の方がきちんとしているんじゃないかと思いますね。水路部と連絡して、所在の方を調べて、どこかできちんと管理して、目録を作っていたかどうかというのが大事だと思います。

今日は私が水路部にありました当時、今まで表に出してない海図などをお見せして、皆さんこういうものがあるということを知っておいていただいて、じゃあこれのどこが見たいというのはまた次の段階とさせていただきます。今回はまず概要だけを整理いたしました。

質疑応答

[編集者の注]

以下の質疑応答の記録については、とくに質問の場合、録音状態がわるく、十分にテープ起こしができなかったところがすくなくない。以下では、したがって主として坂戸氏の談話を収録した。なお、京都大学文学研究科地理学教室蔵の地図・海図については、本ニューズレターの「はしがき」(石原潤「外邦図のこと」)ならびに山村報告を参照していただきたい。

Q.海陸兵要圖について、作られた範囲、大まかな縮尺、何を目的としていたかなど、もう少し詳しく教えてください。

A.私の頭の中にあるのをお話しするのならいいのですが。縮尺もある程度まできちんと決まっていたし、刊行範囲も決めてやっていたんでしょう。国土地理院の方は陸海編合圖とっていたんですよ。水路部の方は海陸兵要圖で、水路部にいけば、資料があると思います。

(中略)

わかりましたらまた連絡をとるようにします。

(中略)

私はどこにどういう資料があるという所在目録があって、そこに海図が入っていればいいと思います。どこかでちゃんとした海図をふくめた目録を作っていたきたい。水路部自身もなかなか場所がないので、とっておくのは難しいそうです。

私も OB としてどうしてなのかなと思うんですけど、水路部も多目的になって、海図を中心とした仕事の他にもやらなきゃいけないことが多いから、なかなか大変らしいですね。

Q. 航空図にカタカナ地名を入れるときに、いろいろな地理学関係者を雇ったわけですね。

A. 私の記憶では、東大の辻村さん、長谷部さん、外国語学校の朝倉さん、文理大の田中さん、内田さんです。

Q. 長谷部さんは地理の人ですか？

A. 私もわかりません

Q. 名簿かなんかは残っているのですか？

A. 残っていると思います。後もうひとつ、戦争がだんだんひどくなるときに、陸の方も、海の方も、なるべく日本の地名をつけようっていうことがあったわけですね。海軍は海軍で日本の地名をつけようと思って、陸の方と連絡を取るようなことをやっていた記憶があるんです。例えば、マリアナ諸島の「マリ」は毬などです。そういうちょっと特別おもしろい地名、そういうのを学会で取り上げたらどうかと思いますね。もう少しソフトな話も聞けるんじゃないかと思うんですね。

Q. シンガポールで接収した英国の秘密図のリストのその後は？

A. その後は、私もその担当じゃなかったものですから。おそらく終戦までは大事にとっておいたでしょうね。終戦の時に隠しておいたらよかったでしょうけど、おそらく処理しちゃったんでしょうね。アメリカのは拿捕しようと思ったらでき

たでしょうけど、英国のはなかなか手に入らなかったと思うんですね。ちゃんとリストをアップデートするために、日本の図誌目録と同じように手書きでみんな書いてあってですね。

Q. この話はどこかにもうお書きになったのですか。

A. 今日話した内容はどこにも話してないんですよ。だからこの資料もあんまり出席した人の手元にだけ置いておいていただいて、これを次の会議の時にもう少し補うようにしていくとよいと思います。

(とくに京都大学所蔵の明治 40 年代～大正期の海図をめぐって)

役所では、大学とかアメリカの水路部のように、丁寧に地図・海図を扱うということがないように思います。大学できちんと保存して、当時の図誌目録とすぐわかるようにしておいていただければいいと思うんです。また当時は、日本の海図は航海専門の主題図とはいいながら、基本図にも使えるような内容に編集してあります。陸を全部省略しろという時代ではないですから。京都大学に保存されているような海図は、大事に保存していただきたい。

<今井氏の補足> 水路部には、明治 20 年代のものから現在まで海図がそろっていますが、残念ながら水路通報によってアップデートされて訂正されています。ですから初刷りのものはあまりない。京都大学にあるのは修正されていないので、海岸線などについて、貴重な資料になると思います。旧版海図は内湾の環境問題

の研究に良く使われています。旧海岸線が埋め立てや防波堤がない状態でどのように湾内の海水が流れたのか、ということシミュレーションによって知ることができます。京大が持っている海図は貴重なので大事に管理していただきたい。(中略)

海図だけではなくて、水路誌も大事です。軍機の水路誌で、相当使える記事がたくさんあるんですね。それは倉庫に埋もれてしまうのはもったいないと思うんですね。例えば、この前水路部で講演したときにも話したのですが、横須賀軍港に戦艦大和とか、武蔵だとか、ああいう超大型艦が入るのに、錨かけをします。海図には錨は描いてありますが、どういう風に錨をかけたらいいかという図面が、水路誌にはちゃんと大きく、こういうふうにとるっていう角度までみな書いてあるんです。また例えば、当時の徳山の燃料廠で、どういうふうに着岸するか、大型艦はどういうふうにつけたらいいか、ということがよく書いてあります。当時はそういうことをするのが当たり前だったのです。

次回には、水路誌のそういうものもできる限りお見せできればと思います。海図だけじゃなく水路誌も。

注

- 1) 坂戸直輝(2002)を参照。
- 2) 技師または修技所高等科卒以上に指定事項を専攻させる(海上保安庁水路部編, 1971, 216)。

文献

- 海上保安庁水路部編(1971)『日本水路史』(財)日本水路協会。
坂戸直輝(2002)「海図に関する昭和の技術小史:水路部とともに歩んだ60年」
地図, 40(2): 2-20, (4): 22-39。
東北大学大学院理学研究科地理学教室
(2003)『東北大学所蔵外邦図目録』同
教室。
吉田満(1952)『戦艦大和の最期』創元社。

一、敷地	所在 京橋區築地五丁目 面積 九五〇〇坪
二、工事	起工 昭和二年七月三十日 竣工 昭和八年五月三十一日
三、建物	面積 一階 六九七平米(宛坪) 延 一〇〇七平米(宛坪)
四、工費	總額 七六四〇〇〇円


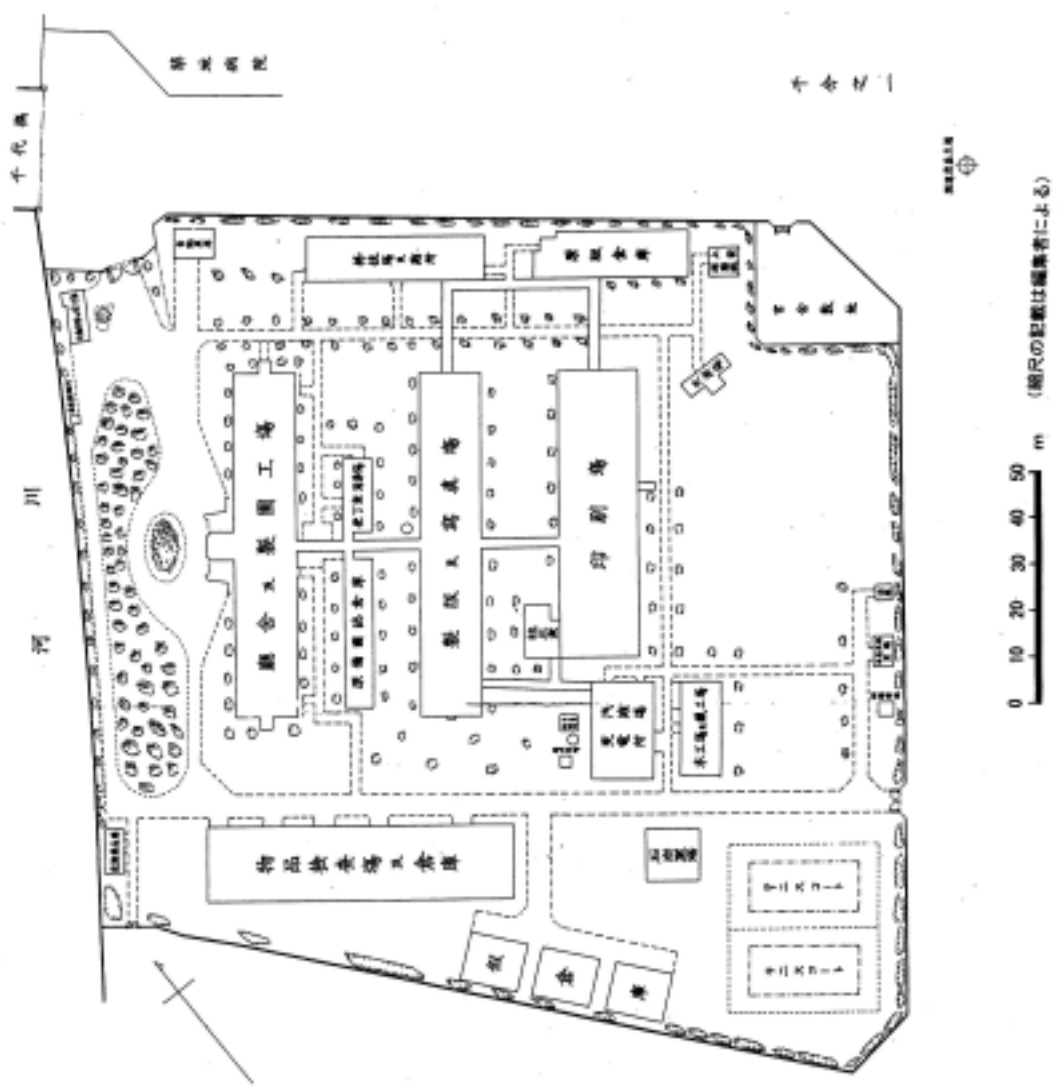



図1 旧水路部の位置

3-6 京都大学総合博物館収蔵外邦図の目録作成作業について

山村亜希（愛知県立大学）

京大総合博物館収蔵外邦図の来歴と現状

京都大学総合博物館には、図幅数 11712・総枚数 13495 枚（うち、現物 11931 枚、コピー 1564 枚）の外邦図（海図を含む）が収蔵されている。これらの外邦図は、京都大学文学部地理学教室が、教室創立の明治 40（1907）年以來収集してきた、貴重な地図資料の一つである。外邦図は、昭和 62 年（1987）に建設された京都大学文学部博物館の地理作業室内に収蔵され、その後同館が総合博物館に組織替えされたので、収蔵場所には変更はないが、館の名称のみ変わり、現在は総合博物館地理作業室に保管されている。

これらの外邦図には、戦前に収蔵されたものも含まれている。収集の経緯は明らかではないものの、陸軍省・海軍省より寄贈を受けたものがあることが分かっている。しかし、その大半は戦後に収集されたものである。1960 年に、お茶の水女子大学の浅井辰郎教授の取り計らいによって、戦後に資源科学研究所に所蔵されていた外邦図の一部（7024 枚）が、文学部地理学教室に収蔵されることとなった。さらに 1997 年夏には、東北大学と、相互に不足する図幅の現物ないしコピーの交換や寄贈が行われた結果、約 5000 枚が加わった。

このような収集の経緯の中で、地理学教室によって何度か外邦図の整理がなされて

きた。整理によって、外邦図は地域ごとに分類され、マップケースに比較的良好な状態で保管されてきた。しかし、その整理作業は、基本的に地域研究の資料としての利用を目的としており、検索を簡易にするために地域別インデックスマップは作成されたが、書誌的情報を含むリストは作成されてこなかった。地域別のインデックスマップも、収蔵分の外邦図をもとに作成されたものであるため、インデックスにない地域は、そもそも作成されなかったのか、その地域の外邦図が京大に収蔵されていないだけなのか、といった点が分からないという限界を持っていた。それは、他大学・他機関に所蔵される外邦図との相違や、本来作成された外邦図全体の中での位置づけが不明であったということでもある。このように、京大総合博物館での外邦図の利用において、外邦図の全貌を把握する必要が認識されていた。

このような現状の中で、本科研による外邦図研究がスタートし、複数の機関に離散した外邦図の書誌情報を統合することを通じて、外邦図の全貌を明らかにする必要性が強く認識された。そこで、2003 年 3 月に発刊された『東北大学所蔵外邦図目録』に続き、2003 年度に京大総合博物館収蔵の外邦図についても目録を作成することとなった。

外邦図目録作成作業の概要

目録作成作業は、2003年3月に京大文学部地理学教室を退官された石原潤先生（現奈良大学）のご指導のもとに、文学部地理学教室の大学院生2人、学部生22人によって、2003年7月22日から8月20日のうちの14日間に行われた。筆者（2003年9月まで京大総合博物館に助手として勤務）及び地理学教室博士課程1年の中辻亨氏が、具体的な内容を現場で院生・学生に指示して作業を進めていった。

対象とする外邦図は、現日本国外の地図（ほとんどが地形図）としたが、旧海軍省水路部作成の海図（956枚）も含めた。従来、まとまった数の海図が存在していることは知られていたが、これらは外邦図以上に把握されておらず、東北大目録に海図が含まれていることから、比較の観点からも海図の書誌情報は意味があると判断し、採録することとした。

作業は、基本的に2003年3月に発刊の『東北大大学所蔵外邦図目録』に準拠し、同目録の記載内容を確認し、修正・追記する形で行った。具体的には、二人一組でチームを組み、一人が外邦図の書誌情報を読み上げ、もう一人が東北大目録のコピーの上に確認・修正した内容を記入する方法で行うことで、一人での判読を避け、できるだけ間違いの少ないように努めた。また、外邦図は地域ごとに書誌情報の様式に大きな差があり、情報の採録に若干の慣れが必要なため、地域ごとに複数のチームから成るグループを割り当てた。外邦図の確認・修正作業と並行して、地域ごとにExcelデータにそれらを転記していった。データに各地域の書誌情報を修正・入力した後、全ての地

域のデータを接合した。そのデータを、2003年9月に、学部生一人と筆者で体裁の統一や明らかな誤記の修正を行った。最後に、2003年12月に、東北大学目録の作成に大きな貢献をされた渡辺信孝氏（仙台都市総合研究機構）に、京大目録のデータを確認し、地域独自の経度基準などを修正して頂いた。

目録作成作業における問題点

作業の中で、当初は想定していなかった問題点・疑問点がいくつか浮上し、対応に苦慮した。最も大きな問題点は、書誌情報をどこまで採録するかということに関して、事前に明確な基準を決めていなかったことである。

地域によっては、作成の経緯、原図の情報、図法、標高の基準、作成部隊名などの書誌情報を詳細に書き入れている外邦図がある。例えば、オーストラリア5万分の1図MUNDARING（ZONE1-399）は、図の枠外に「1942年濠州軍参謀部調製63360分の1五色刷図を5万分の1に伸写し五色に複製」といった記載がみられることから、日本軍が用いたオーストラリア軍製の原図の書誌情報が分かる。アリューション50万分の1図に至っては、図幅名の他に「東四レ502」といった記号が付され、さらに「1941年製米板版50万分の1航空図により編纂し、4万分の1アリューション群島地誌其二（ダッチハーバー・ウラナスカ湾）海図第3503号を参照す」といった、さらに詳しい原図情報が記載される。パラオの2万5千分の1図には、「標高はコロール湾の中等潮位より起算し米突を以て示す」といった標高基

準の情報がみられる。また、多くの外邦図には、「軍事秘密」、「部外秘」、「秘扱」、「極扱」などの印が印刷され、「取扱ニ注意シ用済後焼却」といった詳しい取り扱いも定められているものもある。このような情報は、外邦図の作成の経緯や、他の帝国諸国の地図作成事業との関連、作成の技術、外邦図の利用のされ方などを考える上で、貴重な資料となるだろう。しかし、これらの情報を網羅的に採録するには、膨大な労力と時間が必要となる。実際、このように書誌情報の多い地域(とくに南洋諸島・オセアニア)の作業に入ってから、極端に作業のスピードが落ちた。

どこまでの書誌情報が必要かという判断は、目録の目的や利用方法に関わってくる。地域研究の資料としての外邦図の検索、あるいは他機関・他大学との比較を、目録の主要な目的とするのであれば、これらの詳細な書誌情報を目録に採録する必要はない。また、目録をもとに外邦図を検索し、現物ないしコピーを閲覧して、そこから各研究者が自分の研究に必要なより詳しい書誌情報を入手してもらうという利用方法を想定するのであれば、最低限の書誌情報さえ掲載された目録であれば、十分役立つであろう。今回の作業においては、書誌情報を網羅するのは、現段階の作業状況を考えると現実的でない判断されたため、現物にアクセスするための所在目録として最低限の書誌情報を記載するに留めた。しかし、実際には作業途中でこの判断を行ったので、作業の進行程度によって書誌情報の精度にばらつきが生じてしまった。そこで、詳細な情報は「備考」欄に記載し、「備考」欄は統一されていないことを凡例に示すことと

した。

また、責任表示の判読の仕方について、作業の途中で何度か疑問点が出された。多くの外邦図には、図の左下に、測量・製版・印刷・発行の年次と機関名の記載が並んでいる。複数の機関名が併記されている場合(例えば、陸地測量部と参謀本部)、両者ともを製版・印刷機関と読むのか、それとも併記されている機関はいずれかが製版機関で、もう片方が印刷機関とみなすのか判読が難しい。作業を進める中で、同一の機関名(例えば参謀本部)が二度記載されている地図があり、記載されている複数の機関が製版・印刷機関だとする解釈が難しいことに気づいた。その時点で、後者の判読が妥当なのではないかとの推定に至ったが、このような問題も作業当初には想定できなかった。

京都大学総合博物館収蔵外邦図の特徴

京大総合博物館収蔵外邦図と東北大学所蔵外邦図とを比較すると、いずれかのみにしか収蔵されていない外邦図がある。京大にのみ収蔵の外邦図は、1433 図幅・総数1461 枚(うち現物1430 枚・コピー31 枚)あり、逆に東北大にのみ所蔵の外邦図は、1538 図幅ある。京大にのみ収蔵されている外邦図の多くは、朝鮮半島の地形図や明治期の海図であり、「陸軍省寄贈」や「海軍省寄贈」といった押印も見られる。ここから、戦前にある程度まとまった形で、陸軍省や海軍省から京都帝国大学地理学教室に直接寄贈を受けたものが含まれていることが分かる。これは、戦後の参謀本部ないし資源科学研

研究所からの外邦図の流出（久武,2003）とは異なる経路で、戦前にも外邦図が外部に流れてきたことを示している。

おわりに

今回の作業で作成した京大外邦図目録は、近日中に発刊する予定である。今後の学術研究・教育に活用して頂きたい。また、書いたように、この目録は書誌情報を網羅していないという点で、「未完」のデータベースである。今後の研究の中で、書誌情報の充実を図っていくとともに、間違いなどが見つければ修正を加え、目録を発展させたい。また、今後、外邦図の目録を作成される場合には、ここで述べた点を参考に、事前に十分な「作戦」を立てられることをお勧めする。

文献

- 東北大学大学院理学研究科地理学教室
（2003）『東北大学所蔵外邦図目録』,東北大学大学院理学研究科地理学教室.
- 久武哲也（2003）旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学・研究施設等所蔵の外邦図との系譜関係,外邦図研究ニューズレター,1,15-20頁.

3-7 アメリカ議会図書館所蔵の旧日本軍撮影・ 中国空中写真の概況

今里悟之（大阪教育大）・長澤良太（鳥取大）・久武哲也（甲南大）

はじめに

外邦図研究グループでは、2002年9月、アメリカにおける外邦図の所蔵状況について、久武と今里の2名で第1回調査を行った。調査先は、アメリカ議会図書館（ワシントン DC）、アメリカ地理学協会の地図室（ウィスコンシン大学ミルウォーキー校 Golda Meir 図書館）、ハワイ大学ハミルトン図書館（ホノルル）の3カ所であった。その際、アメリカ議会図書館（略称 LC）に、旧日本軍が撮影したとされる、中国の空中写真が多数所蔵されていることが判明した（今里・久武 2003a, b）。

前年度のこの結果を受けて今回、この LC 所蔵の空中写真に焦点を絞り、第2回調査を行った。アメリカでの現地調査は、2003年9月22～29日にかけて、長澤と今里の2名で実施した。調査にあたっては、前回に引き続き、LCの目録部日本課の藤代眞苗氏と、アジア部の太田米司氏にご協力いただいた。

流出経路

この空中写真は、LCの Adams 館の屋根裏倉庫に保管されている。ここの書架には、第二次大戦の終戦時にアメリカが満鉄から接收した資料約6～7万点も保管されており、すべて藤代氏が数年をかけて整理されたものである。藤代氏によれば、これらの資料は、空中写真も含め、1996年にワシ

トン文書センター（WDC）から移管されたもので、それ以前の流出経路の詳細は不明であるという。

空中写真は、およそ撮影コース順に数十枚から百数十枚ごとに簡易包装され、包装紙に地区名・撮影年月日・写真番号・枚数が記入されている。撮影年については、昭和17年もしくは昭和18年との記入がある。それぞれの空中写真の裏面にも、鉛筆で写真番号が記入されている。これらの記入は藤代氏が行ったものではなく、字体等から判断して、おそらく満鉄関係者、もしくは接收に関わった日本人担当者が記入したものである。これらの書誌情報にもとづいて藤代氏が、LCの索引カードを作成し、空中写真自体の包装についても補強を行ったものである。

今回の調査では、まず現物一枚一枚を一通り確認して、書誌情報を記録した。次に、資料的にとりあえずの価値が大きいと判断されたもののみを、A4のスクャナー2台で分担して撮影し、画像はノートパソコン2台に保存した。このスクャニング作業についても、LCスタッフの許可を得て行った。

撮影地域と枚数

空中写真の撮影地域は、長江下流域北方の江北地区、現在の省名では江蘇省・安徽省の一部である。総数は2100枚、すべてモノクロである（写真1）。地区ごとの枚数は、五河地区278枚、五河南方・安淮集地区41



写真1 旧日本軍撮影の中国中支地域の空中写真（アメリカ議会図書館所蔵）

枚，界首鎮西方 87 枚，阜寧南方 120 枚，宝應西南方 197 枚，六甲鎮地区 258 枚，興化地区 265 枚，中支地域 854 枚である。

今回スキャナーで撮影したのは，五河地区，五河南方・安淮集地区，界首鎮西方，阜寧南方，宝應西南方の計 723 枚である。これ以外の地区については，それぞれ，六甲鎮地区については現在の地名との比定が現時点ではやや困難である，興化地区については写真の劣化が著しい，中支地域については詳細な地名が不明のため比定が困難である，との理由から，一部のサンプルを除いて今回はスキャニングを行わなかった。

この 2100 枚の地域は 地方の小規模な中心集落を一部に含むものの，すべて農村地域である。例えば，散居村，環濠集落，クリーク集落，集村と短冊状耕地，区画整理された塩田集落，汎濫原の開拓地など，集落地理学的にみても大変興味深い。スキャニングしたものについては，おおよそ撮影地の比定は可能であると見込まれる。

判明点と疑問点

空中写真の大きさは，32×32cm であり（ただし切り方が乱雑で形が歪んでいるも

のも相当数ある),現在の日本で一般に製作されているものより,かなり大きい。そのため,写真1枚につき,全体の約3分の2の面積のみをスキャニングせざるを得なかった。ただし,写真のオーバーラップは約60%,サイドラップは約30%であるため,このようなスキャニング方法であっても撮影範囲はすべてカバーできている。縮尺は1万分の1から2万分の1程度と推測されるが,場合によっては4万分の1程度の可能性もある。

五河地区や中支地区などの一部の空中写真(全体の数%程度)の隅には,濱安または河井という姓名が焼き込まれており,これらは撮影または製作関係者のものと推測される。さらにこれらの写真には,同じ位置に撮影年月日も焼き込まれている。しかしながら,撮影年は写真の包装紙に記載された「昭和17年」もしくは「昭和18年」ではなく,例えば「9.10.26」と表示されている。この場合,写真の画像から判断しても,10月26日の撮影であることはおそらく間違いはないが,最初の数字の「9」とは何かということが大きな疑問点として残る。これは,撮影年月日が焼き込まれた写真すべてについて当てはまる。

今後の課題

したがって当面の課題は,これらの書誌情報の疑問点を解明することと,スキャニングした写真の現地比定を行うことである。これらの作業にもとづいて,地域環境資料あるいは歴史地理学的資料としての活用が,今後検討されることになるだろう。

文献

- 今里悟之・久武哲也 2003a.(発表要旨)在アメリカ外邦図の所蔵状況:議会図書館・AGS Golda Meir 図書館・ハワイ大学ハミルトン図書館の調査から.季刊地理学 55-1:76-77.
- 今里悟之・久武哲也 2003b.在アメリカ外邦図の所蔵状況:議会図書館・AGS Golda Meir 図書館・ハワイ大学ハミルトン図書館の調査から.外邦図研究ニューズレター1:33-36.